身体的温かさと性格的温かさの相互作用
－自己・他者評定の順序および性役割観の効果を含めた検証－

首都大学東京大学院　人文科学研究科　人間科学専攻　心理学分野
博士前期課程　中島 一稀
学修番号　14861102

指導教員　教授　沼崎 誠

要旨

この研究は身体的温かさと性格的温かさの相互作用を身体性認知の観点から検討したものである。実験 1 では身体の温かさ/ 冷たさ感覚が自己・他者評定に与える影響を実験室実験によって検証した。その結果、想定していた温度の影響は見られず、「暑い中で冷たいものを持つと自己および他者の評定が高くなる」という気分一致効果が確認された。また、この効果は男性参加者の性役割態度や評定順序によって調整されており、伝統主義的性役割観を持つ男性と平等主義的性役割観を持つ男性の“男女間の序列意識”や“女性のサブカテゴリー表象”の差異が気分一致効果を促進または抑制すること示唆されていた。実験 2 では実験 1 とは因果関係を逆転させ、評定他者の性格的温かさと有能さが周囲の環境の温度推定に及ぼす影響を質問紙実験によって検証した。その結果、女性参加者は直前に見た人物の性格的温かさや好意の高さによって室温推定を高めることが示唆されていた。これは性格的温かさ特性と有能さ特性が負の関係となっている他者を見ても身体性による影響が見られることを示唆していた。ただし、室温推定のパターンには性差が確認され、伝統主義的な男性ではキャリア的女性を見ると室温を高く推定するようになるという、女性とは異なる結果が見られた。また、実験 1 で示唆された「性役割観と評定順序の影響」についても検証を行ったが、自己評定については事前評定の高低によって変化量が既定される回帰が実験要因の影響と交絡する形で見られた。他者評定については男女問わず家庭的女性を“温かく能力が低い”と、キャリア的女性を“冷たく能力が高い”と評定することが示されていた。また、伝統主義的な参加者は、キャリア的な女性に対する好意をより高く評定することが確認された。温度による影響が男女で異なる点や他者評定が性役割態度で異なる点については、更なる検証とより包括的な解釈を要することが示唆された。

問題

身体性認知研究における身体的温かさと性格的温かさ

人が思考や判断を行う際には、五感（視覚、触覚、聴覚、嗅覚、味覚）や、姿勢、筋運動といった身体状態が影響を与え得ることが明らかになっている。近年、こうした感覚運動情報と抽象的概念の相互作用を検証する身体性認知（embodied cognition）研究が社会心理学をはじめとする領域で盛んに行われており、その中では様々な感覚や身体状態を考慮した実験が数多く報告されている（e.g., 重さや質感；Ackerman, Nocera, Bargh, 2010, 硬さ；Slepian, Weisbuch, Rule, Ambady, 2011, 臭い；Lee & Schwarz, 2012, 高地位姿勢；Carney, Cuddy, & Yap, 2010）。

こうした身体性実験の多様さは、人の感覚運動モダリティの多様さにそのまま起因していると考えられる。触覚（皮膚感覚）はそうした数あるモダリティの中でも最も盛んに研究されている感覚の一つである。皮膚感覚を用いた著名な研究として Williams & Bargh（2008）の研究が挙げられる。この研究では皮膚の温度感覚が対人認知や判断に及ぼす影響を、参加者に持たせる物の温かさを操作することで検証している。研究は 2 つの実験で構成されており、実験 1 では、参加者に温かいコーヒーか冷たいコーヒーの入ったカップを持たせ後で他者の印象評定課題を行わせた結果、温かいカップを持った参加者の方が冷たいカップを持った参加者に比べて評定対象の他者をより「温かい性格である」と判断していた。また、実験 2 においては、参加者に温かい治療用パッドあるいは冷たい治療用パッドを持たせた後で実験の謝礼の対象（自分用 vs. 友人用）を選択させた結果、温かいパッドを持った参加者は友人用の謝礼を選択するという向社会的判断がとられるようになっていた。こうした温度操作による性格的温かさへの影響は、手に持つ物の温度だけでなく、参加者の周辺温度を操作した場合でも同様に見られることが明らかになっている（e.g., IJzerman & Semin, 2009）。また、身体的冷たさと社会的冷たさの関連に焦点を当てた Bargh & Shalev（2012）の研究では、冷たさの感覚が自己の孤独感を増加させることが示されており、温度感覚の影響は他者認知だけでなく自己認知に対しても効果を持つことが示唆されている。

身体的・性格的温かさの連合

身体的温かさと対人認知および自己認知との関連性を示す上記の結果は、身体的温かさの表象と性格的温かさの表象の連合によるものと考察されている（e.g., Williams & Bargh, 2008）。この連合を支持する重要な手掛かりとなるのが Harlow（1958）と Bowlby（1969）の研究である。Harlow の代理母実験では、母親の居ない子ザルが冷たい針金製の母親の人形に比べて温かい布製の母親の人形をより好むことや、針金製の代理母に育てられた子ザルに比べて布製の代理母に育てられた子ザルは適応的に発達することが明らとなっている。この布製の代理母と針金製の代理母の温かさは、人形の後ろに設置された 100W の電球の

有無によって操作されていた。電熱による温かさが代理母への好意や子ザル自身の発達に重要な影響を与えたという結果は、身体的な温かさ表象と性格的な温かさ表象の連合を支持するものである。また、Bowlby の愛着理論では、乳児は親をはじめとする特定他者との身体的接触を求めようとする生得的な傾向を有していることや、特定他者との相互作用が愛着形成に重要な役割を果たすこと等が主張されており、養育者との身体的接触が上述の連合の基盤となることが示唆されている。さらに、近年の神経生理学研究では、身体的温かさの情報処理時と性格的温かさの情報処理時には共通した脳の部位（島皮質）が活性化することが示されており（Kang, Wiliams, Clark, Gray, & Bargh, 2011; Inagaki & Eisengerger, 2013）、身体的および性格的温かさの表象連合が実証的にも支持されている。

自己認知と他者認知

Williams & Bargh （2008）の研究では、温かさ感覚によって自己（i.e., 向社会的行動）と他者（e.g., 性格的温かさ）の両方が“温かい”方向に変化していた。しかし、皮膚感覚による影響が自己認知と他者認知に対して異なる効果を持つことも示唆されている。沼崎・松崎・埴田（2015）の実験では、身体的な柔らかさ－硬さの感覚が性格的温かさ－冷たさの表象と連合しているという仮説の下、参加者にゴム製の柔らかいボールあるいは針金製の硬いボールを持たせながら自己の性格評定および他者（女性）の印象評定を行わせることで身体性による性格的温かさへの影響を検証している。実験の結果、他者評定については、柔らかいボールを持った参加者は硬いボールを持った参加者に比べて、性格的温かさと関連する「ターゲット人物への好意」と「女性的ポジティブ特性」を高く評定していた。これは温度感覚による性格的温かさへの影響と一致する結果である。一方、自己認知については柔らかいボールを持つと自己の「男性的ネガティブ特性」を高く評定するという、他者認知とは逆の現象が見られていた。この結果について沼崎他（2015）は、温度感覚と同様に柔らかさ－硬さの感覚が性格的温かさ－冷たさと連合して表象されていると考察する一方、柔らかさ－硬さの感覚は物理的温度と違って熱伝導性を有していないため、自己と他者では異なる結果が見られたと考察している。つまり、熱と異なり手に持つ物の柔らかさは自己に伝わらないため、柔らかいボールを持つと相対的に自己を“硬く”感じるようになり、硬さ感覚に対応する性格的冷たさ関連の評定を増加させたということである。上記の考えに基づいて温度感覚が自己および他者認知に及ぼす影響について考えると、物体の温度には伝導性があるため、温かい/ 冷たい物を持つと自己および他者認知が同じ方向に変化すると予想できる。つまり、温かい物を持つと自己、他者両者の性格的温かさを高く評定するということである。本研究の実験 1 ではこの仮説の正否も含め、過去の温度感覚を用いた身体性研究と同様、身体的温かさ/ 冷たさの感覚が性格的温かさ特性の評価を増加/ 減少させるかどうかを検証した。

ジェンダー・ステレオタイプにおける共同性次元と作動性次元

これまで見てきたように、温度感覚の影響については性格的温かさと関連する特性や行動を対象とした検証が多くされているが（e.g., Williams & Bargh, 2008; IJzerman & Semin, 2009；愛他的行動 IJzerman, Karremans, Thomsen, & Schubert, 2013）、その他の性格特性にも温度が影響を及ぼす可能性がある。

例えば、ジェンダー・ステレオタイプ研究において、女性のステレオタイプには「伝統的女性」や「非伝統的女性」等のサブカテゴリー・ステレオタイプが存在していることが知られているが（e.g., Eagly, Mladinic, & Otto, 1990）、そうしたステレオタイプの内容は「共同性（i.e., 性格的温かさ）」と「作動性（i.e., 有能さ））」という 2 次元によって規定されることや（e.g., Fiske et al., 1999）、両次元は負の相関関係となることが明らかとなっている（e.g., Cuddy, Fiske,& Glick,2008）。このような相補性をもつ両面価値的ステレオタイプ（ambivalent stereotype）は、「温かいが能力が低い（家父長的ステレオタイプ）」というクラスタと、「有能だが冷たい（嫉妬的ステレオタイプ）」というクラスタに二分され（Figure 1）、伝統的性役割に一致した女性（e.g., 家庭的女性、主婦）は前者の、伝統的性役割に不一致な女性（e.g., キャリア的女性）は後者のステレオタイプ内容になりやすいことが示されている（Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002）。

この両面価値的ステレオタイプの相補性を考慮すると、身体的な温かさ/ 冷たさによって評定人物の性格的温かさ評定が高まる/ 低まると仮定した場合、別の次元である有能さ評定については性格的温かさ評定とは逆の方向に変化する可能性が考えられる。そのため、実験 1 では、有能さ評定が温度感覚によって変化するか、ということも併せて検証した。仮説としては次のようになる。まず、他者認知については、「温かさ感覚によって性格的温かさ評定が高まるが、有能さ評定はステレオタイプの相補性が働くことで低くなる」と予測できる。一方、自己認知については他者認知とは異なり、自己高揚動機による影響が見られると予想する。つまり、「温かさ感覚によって性格的温かさ評定が高まるが有能さ評定はあまり変化しない、冷たさ感覚によって性格的温かさ評定が低くなるが有能さ評定は補償的に高くなる」と予測できる。実験 1 ではこの点についても検証を行った。

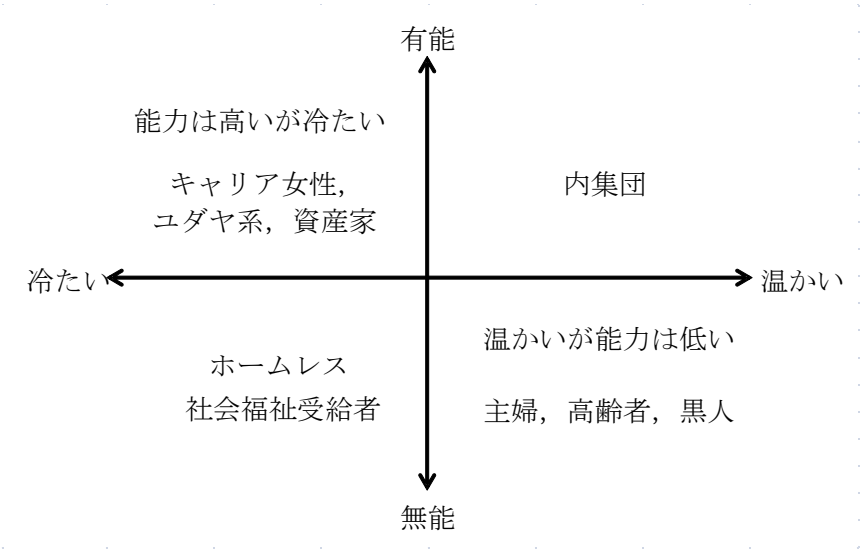


Figure1. ステレオタイプ内容の二次元（Fiske et al, 2002 を参考に作成）

身体的./ 性格的温かさの双方向的関連性

「温かさ」をはじめとする抽象的表象と身体感覚との関連は単一方向性のものであると考えられてきたが（Bargh, 2006）、身体感覚（e.g., 温かい感覚）と抽象的表象（e.g., 性格的温かさ）の関連性は双方向的であることが近年の研究で明らかとなっている。身体的温かさと対人認知における共同性次元の連合に着目した Szymkow, Chandler, IJzerman, Parzuchowski, & Wojciszke（2013）の実験では、共同性の高い他者（e.g., 優しい、親切、親しみやすい）を評定した参加者は、作動性の高い他者（e.g., 有能、活動的、きちんとした）を評定した参加者に比べて、自分の居る部屋の室温をより高く推定していた。また、他者との類似性や対人間の物理的距離、社会的排斥の想起および経験、援助行動等が室温推定や温かさへの希求に影響することも報告されている（e.g., Zhong & Leonardelli, 2008；IJzerman & Semin, 2010; Hu, Li, Jia, & Xie, 2016）。このように、性格的温かさをはじめとする抽象概念が身体的温かさに与える影響を検討する実験ではしばしば室温推定が用いられている。そのため、実験 2 では性格的温かさ特性が高い他者と低い他者を評定することで周囲の環境の温度推定が変化するかどうかを、質問紙によって検証した。

加えて、そうした変化がジェンダー・ステレオタイプに一致する他者を評定する場合にも見られるかどうかも確認した。Szymkow et al（2013）の実験では、共同性次元と作動性次元のどちらか一方のみが強調された人物を評定他者として参加者に呈示していた。しかし、先述の女性サブカテゴリーに見られるように、一方の次元が高く、他方の次元が低いような性格をもつ他者も存在すると考えられる。そこで実験 2 では、単なる「温かい人」「冷たい人」ではなく、相反する共同性と作動性をもつ「家庭志向女性」と「キャリア志向女性」を評定他者として参加者に呈示し、室温推定への影響を検証した。

個人差としての性役割観の影響

先述のようなジェンダーに関わる自己認知や他者認知については、個人の性役割観によって調整されることが指摘されている（沼崎, 2006, 2012）。そこで今回は個人差要因として参加者の平等主義的性役割観（鈴木,1994）を測定し、性役割観の影響も考慮した上で予測を検討した。

実験 1

―温度感覚が自己認知と他者認知（ジェンダー・ステレオタイプ）に及ぼす影響―

実験 1 では男性参加者を対象に、皮膚の温度感覚が自己と他者（女性）の性格評定、とりわけ“性格的温かさ”と“有能さ”に関連する特性に影響がみられるのかを実験室実験によって検証した。温度の操作については Williams et al（2008）や Ishii & Numazaki（2012）の実験を基に、予め温めたあるいは冷やした温熱パッドを参加者に持たせることで、温かさ/ 冷たさ感覚を生起させた。

本実験では温度感覚による影響が自己認知と他者認知で異なる可能性も検証した。性格的温かさ評定については自己・他者認知ともに温かい感覚によって評定が増加すると考えられるが、有能さ評定については、他者認知では両面価値的ジェンダー・ステレオタイプの相補性によって性格的温かさとは逆の方向に変化すると考えられる。また、自己認知では自己高揚動機が働くことで、冷たさ感覚によって性格的温かさ評定が低下すると有能さは補償的に増加すると考えられる。こうした相補性による影響を観察しやすくするため、評定対象の他者については性格的温かさや有能さの高低が曖昧な女性として、「家庭もキャリアも両方志向する女性プロフィール」を呈示した。また、参加者には自己評定と他者評定の両方を行わせ、評定順序（自己⇒他者 vs. 他者⇒自己）についてはカウンターバランスをとった。

仮説は以下の 2 つである。

1. 【自己評定】温かいパッドを持つと冷たいパッドを持つ時と比べて、自己の性格をより「温かい」と判断するようになるが、有能さについてはあまり変化が見られないであろう。一方、冷たいパッドを持つと、自己の性格的温かさをより「冷たい」と判断するようになるが、能力については自己高揚動機が働くことでより「有能である」と判断するであろう。
2. 【他者評定】温かいパッドを持った男性は冷たい温かいパッドを持った男性に比べて、「性格が温かいか冷たいかあいまいな女性」の性格をより「温かい」と判断するようになるが、能力についてはステレオタイプの相補性が働くことでより「有能ではない」と判断するようになるであろう。一方、冷たいパッドを持つ場合は反対のパターンが見られるであろう。

方法

実験計画　パッドの温度（温かいパッド vs. 冷たいパッド）×評定順序（自己⇒他者 vs. 他者⇒自己）×平等主義的性役割観 SESRA（連続変量）×評価次元（性格的温かさ vs. 有能さ）の混合要因計画。前 3 つは参加者間要因であり、後 1 つは参加者内要因であった。

実験参加者

首都大学東京の一般教養科目「心の科学」を受講していた男子大学生 63 名。参加者は 2（パッドの温度：温かい vs. 冷たい）×2（評定順序：自己⇒他者 vs. 他者⇒自己）の 4 条件にランダムに割り当てられた。参加者は実験に参加し、実験の内容に関するレポートを提出することで授業の評価に加点されることが予め告げられていた。

実験操作材料

温かさ－冷たさ感覚の操作には、縦 7cm×横 20cm の温熱パッドを用いた（Figure 2）。布製カバーを被せた温熱パッド 2 枚を角型 6 号封筒に封入し、それをさらに角型 5 号封筒の中に入れた。この 5 号封筒を回答用紙付きのボードに固定し、参加者に配布した（Figure3）。温熱パッドは、温かいパッド条件では 54℃に設定したお湯で予め約 10 分間温めたものを、冷たいパッド条件では冷蔵庫（株式会社ユーイング製　冷凍冷蔵庫 MR-F140D）で約 90 分間冷やしたものを使用した。



Figure 2.　温熱パッド



Figure 3. パッド入り封筒が固定された回答用紙

実験時期　2016 年 7 月中旬

手続き

参加者には予め実験実施の約 2 ヶ月半前に平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S, 鈴木, 1994）（**Appendix**）と、性格的温かさと有能さに関する自己評定項目に回答させていた。

実験は「自己の性格・他者の印象評価研究」と「科学商品の性能評価研究」という無関連な 2 つの研究を行うというカバーストーリーのもと、1~4 名の小集団で実施された。実験室の室温は 25.3 ~ 26.1℃、湿度は 64 ~ 72%の範囲で設定されていた（実験室状況は **Appendix** 参照）。来室した参加者を所定の場所に座らせ、開始予定時間になり次第、実験やレポートに関する説明を始めた。その後、「科学商品の性能評定課題で使用する商品が入っている」として、参加者にパッド入り封筒が固定された回答用紙を配布し、指示があるまで封筒を開けないよう指示した。次に、課題を行う間の参加者の姿勢が回答に影響する可能性があるとして、説明を聞く間や回答終了後の待機中の姿勢（Figure4）については“背中を椅子の背もたれにつけて座ること”、“封筒の下部を両手でしっかりと持ち、ももの上あたりで保持すること”、回答中の姿勢（Figure5）については“非利き手で封筒の底を支えるように持ち、利き手で回答を記入すること”、“めくったページを手で押さえたりせず、非利き手で封筒を支えた状態で回答を続けること”を指示した。実験の流れに関する説明を挟み、姿勢の指示が終了した後、課題に移った。実験課題は以下の 2 つのパートに分かれており、スクリーンに表示される各課題の質問に対する回答を回答用紙に記入させた。

第 1 パート

自己の性格評定課題　性格的温かさ関連項目である SD 尺度（「親しみにくい－親しみやすい」「暗い－明るい」「感じの悪い－感じの良い」）と有能さ関連項目である SD 尺度（「愚かな－知的な」「無能な－有能な」「能力の低い－能力の高い」）、計 6 項目に 7 件法で回答させた。

他者の印象評定課題　人物の印象を評定する課題として、ある女性のプロフィール[1]（**Appendix**）を読んで印象を回答するように依頼した。女性のプロフィールを 120 秒間呈示した後、女性の印象に関する質問として自己評定で用いたものと同様の性格的温かさ関連 3 項目と有能さ関連 3 項目、計 6 項目の SD 尺度に 7 件法で回答させた。その後、女性への好意を測定する 4 項目に 7 件法で回答させた（個人的好意：「この女性に対してどの程度好感が持てると思いますか」「この女性はどの程度魅力的な人だと思いますか」、仕事仲間としての好意：「あなたが将来就職したとして、職場の同僚としてこのようなタイプの女性と一緒に働きたいと思いますか」「このようなタイプの女性と一緒に作業してみたいと思いますか」、1：全く思わない－7：非常に思う）。

---

[1] 沼崎（2013）で用いられた「家庭もキャリアも両方志向する女性プロフィール」を一部変更した上で使用した。性格的温かさと有能さの高低が曖昧な女性になるよう、プロフィール内容には伝統的女性の性役割に一致する内容と一致しない内容が含まれていた。

記憶課題（フィラー課題）　科学技術に関する文章を 40 秒間呈示した後に、文章に関する簡単な質問 3 項目に回答させた。文章は日経産業新聞に掲載された記事（「待ち時間や行き先案内　空港･駅でビーコン利用拡大」2016 年 6 月 23 日）を基に作成した（**Appendix**）。

第 2 パート

ムードチェック　科学商品の性能評価を行う前に行う課題として、参加者の「現在の気分」に関する質問 4 項目（「いらいら」「気分が悪い」「心地よい」「楽しい」）を呈示し、各項目に自分の状態がどの程度当てはまると思うか、7 件法で回答させた（1：全く感じない～7：強く感じる）。

パッドの温度推定　ムード項目に回答させた後、封筒の中に入った科学商品に関する質問 4 項目に回答させた（「封筒を渡された直後、封筒越しに触った感覚として、どのくらい温かさ・冷たさを感じましたか」「現在、封筒越しに触った感覚として、どのくらい温かさ･冷たさを感じますか」「封筒を渡された直後、中に入っている科学商品の温度は何℃くらいだと感じましたか。おおよその数値を回答してください」「現在、中に入っている科学商品の温度は何℃くらいだと感じますか。おおよその数値を回答してください」）（前半 2 項目は[1：冷たい~7：温かい]の 7 件法、後半 2 項目は数字での回答）。

参加者がパッド入り封筒を保持する時間を出来るだけ統制するため、実験や課題の説明および質問項目は全てスクリーン上に表示した。また、姿勢の指示については Figure4 と Figure5 および指示文をスクリーン上に表示するとともに、回答用紙表紙にも添付していた。加えて、今回の実験では自己・他者の評定順序によって封筒を持ち始めてから評定するまでの時間に差が生じることを考慮し、「自己⇒他者」条件では「記憶課題」、「自己の性格評定」、「他者の印象評定」の順、「他者⇒自己」条件では「他者の印象評定」、「記憶課題」、「自己の性格評定」の順で課題を実施した。参加者には課題の順番はランダムに設定されていると教示した。

実験の説明から課題終了までに要した時間は約 18 分、参加者がパッド入りの封筒を持っていた時間は約 15 分間であった。全員が全ての項目への回答を終了した後、科学商品の性能評価課題は行わないことを告げ、実験の本当の目的や実験内容の解説を含めたデブリーフィングを行った。その後、実験の本当の目的を踏まえた上でデータ提供を承諾または拒否することができることを伝え、データの使用許可を得られた参加者にのみ承諾書を置いて帰ってもらい、実験を終了した。



Figure 4. 待機中の姿勢



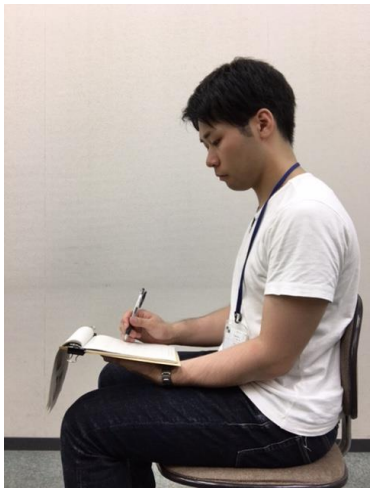


Figure 5.　回答中の持ち方と姿勢

結果

実験参加者 63 名のうち、実験の本当の目的に気付いていた 2 名、事前の平等主義的性役割観尺度（SESRA）に未回答であった 1 名を除外した 60 名のデータを使用して分析を行った。

分析方法

標準化した事前の SESRA 得点に対してパッド温度×評定順序の分散分析を行ったところ、有意な効果は見られなかった（$Fs < 1.464$, *n.s.*）。SESRA 得点と実験操作要因は独立であると考えられるため、従属変数に対してはパッド温度（温かい vs. 冷たい : 参加者間）×評定順序（自己⇒他者 vs. 他者⇒自己 : 参加者間）×評定次元（性格的温かさ vs. 有能さ:参加者内）×事前の SESRA のすべての効果を含む一般線形モデルによる分析を行った。

操作チェック

温度操作

パッドの温度に関する 4 項目（α = .719）の評定値を標準化し、単純加算平均を算出した。平均値に対して独立したサンプルの t 検定を行ったところ、温かいパッド条件の参加者は冷たいパッド条件の参加者に比べて封筒の中に入ったパッドの温度を有意に“温かい”と評定していた（$t(58) = 11.151$, $p < .001$; 温：$M = .730$, $SD = .551$, 冷：$M = -.684$, $SD = .427$）。これにより、温度操作は正しく行われていたと判断した。

ムード

「心地よい」、「楽しい」をポジティブ項目、「いらいら」、「気分が悪い」をネガティブ項目とし、各々2 つの得点を合算して、ポジティブ得点からネガティブ得点を減算したものをムードの指標（ムード得点）とした。ムード得点を従属変数として、パッド温度×評定順序×事前の SESRA の一般線形モデルによる分析を行ったところ、有意差は見られなかった（$Fs < 2.068$, *n.s.*）。

従属変数

自己評定「性格的温かさ変化量、有能さ変化量」

性格的温かさ関連 2 項目[2] （「暗い－明るい」「親しみにくい－親しみやすい」）および有能さ関連 3 項目の単純加算平均（α s = .827, .656）から事前に測定した同項目の平均値を減算し、得点が高いほど自己評定が“温かい”および“能力が高い”方向に変化したことを意味するように変化量を求めた。この性格的温かさ変化量と有能さ変化量に対して、温度×評定順序×評定次元×SESRA のすべての効果を含む一般線形モデルによる分析を行った。その結果、温度の主効果（$F(1, 51) = 7.354$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .126$ ；温：$M = -.281$、冷：$M = .147$）と温度×順序の交互作用効果が有意であり（$F(1, 51) = 7.377$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .126$）、より上位の効果である温度×順序×SESRA の交互作用効果が有意傾向であった（$F(1, 51) = 2.860$, $p = .097$, $\eta_p^2 = .053$）。この 3 要因の交互作用のパターンを検証するために、平等主義的性役割観尺度得点（以下、SESRA 得点）が高い参加者（+1SD）と低い参加者（-1SD）に分け、自己評定の変化量の平均値をプロットしたものが Figure6 である。SESRA 得点の低い群（伝統主義的男性）では「他者⇒自己」順序条件においてのみ、「冷たいパッド」条件（$M = .599$）で自己の全体的な評定を事前よりも高く評定し、「温かいパッド」条件（$M = -.749$）で事前よりも低く評定する傾向が見られた（$p < .001$）。一方、SESRA 得点の高い群（平等主義的男性）では、温度、順序の効果は見られなかった。

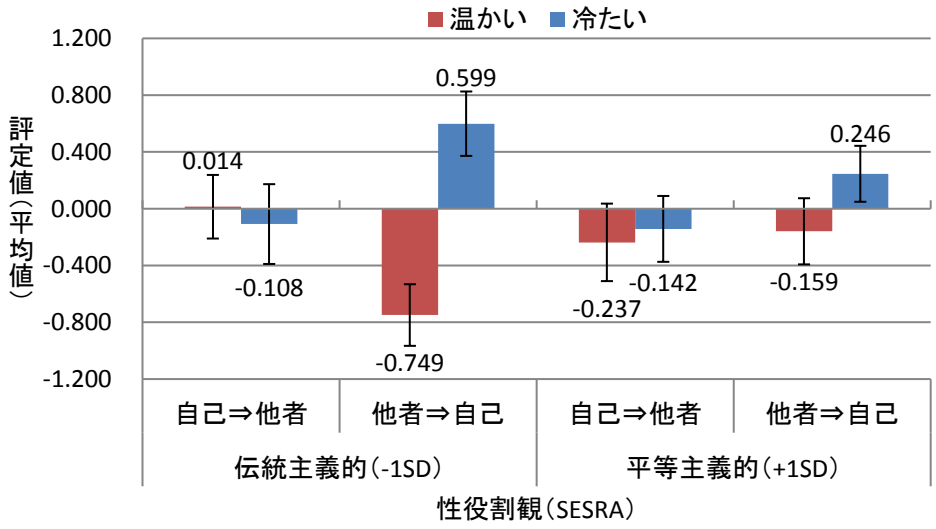


Figure 6. 自己評定の変化量（性格的温かさ・有能さ）における温度×評定順序×SESRA の分析結果（推定値）

[2] 本来は性格的温かさ関連の“3 項目”の平均値を算出する予定であったが、「感じの悪い－感じの良い」項目が事前の自己評定で測定した項目と一致していなかったため、自己評定項目から除外した。また、自己評定との項目内容を揃えるため、他者の性格的温かさ評定の平均値からも同様に同項目を除外している。

他者評定「性格的温かさ、有能さ」

「性格的温かさ関連 2 項目」および「有能さ関連 3 項目」の平均値（α s = .393, .842）に対して、温度×評定順序×評定次元×事前の SESRA のすべての効果を含む一般線形モデルによる分析を行った。その結果、評定次元の主効果が有意であり（$F(1, 52) = 4.350$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .077$）、温度の主効果（$F(1, 52) = 3.582$, $p = .064$, $\eta_p^2 = .069$）および温度×SESRA の交互作用効果が有意傾向であった（$F(1, 52) = 3.341$, $p = .073$, $\eta_p^2 = .064$）。評定次元については、有能さ（$M = 4.567$）よりも性格的温かさ（$M = 4.917$）の方が高く評定されていた。温度×SESRA の交互作用のパターンを検証するために SESRA 得点が高い参加者（+1SD）と低い参加者（-1SD）に分け、評定値の平均値をプロットしたものが Figure7 である。SESRA 得点の高い群（平等主義的男性）では、温かいパッド条件（$M = 4.341$）よりも冷たいパッド条件（$M = 5.025$）の方が、プロフィールの女性の全体的な印象を高く評定していた（$p < .01$）。一方、SESRA 得点の低い群では有意な効果は見られなかった。

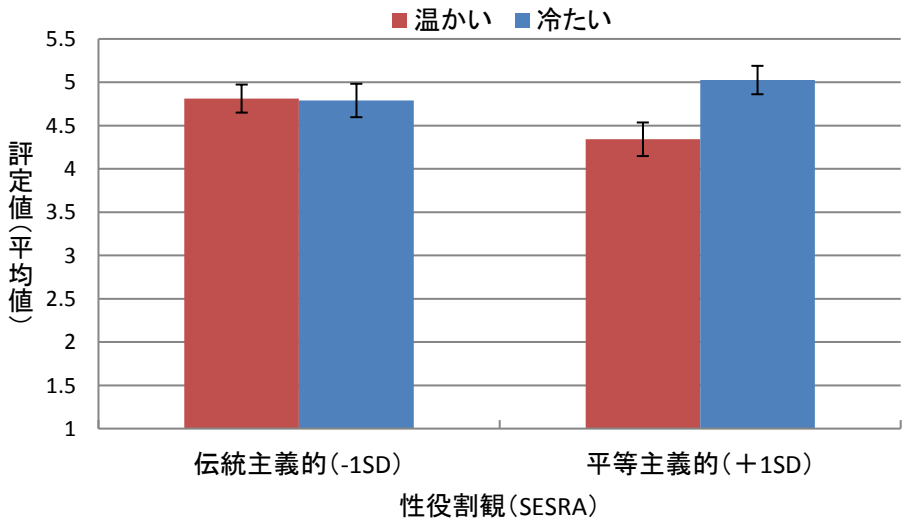


Figure 7. 他者評定（性格的温かさ・有能さ）における温度×評定順序×事前の SESRA の分析結果（推定値）

他者評定「個人的好意、仕事仲間好意」

「個人的好意 2 項目」および「仕事仲間好意 2 項目」の平均値（α s = .790, .896）に対して温度×評定順序×評定次元×事前の SESRA のすべての効果を含む一般線形モデルによる分析を行った。その結果、温度条件の主効果が有意であり、温かいパッド条件（$M = 4.239$）よりも冷たいパッド条件（$M = 4.833$）の方がプロフィール女性の全体的な好意を高く評定していた（$F(1, 52) = 4.060$, $p = .049$, $\eta_p^2 = .072$）（Figure 8）。その他に有意な結果は得られなかった。

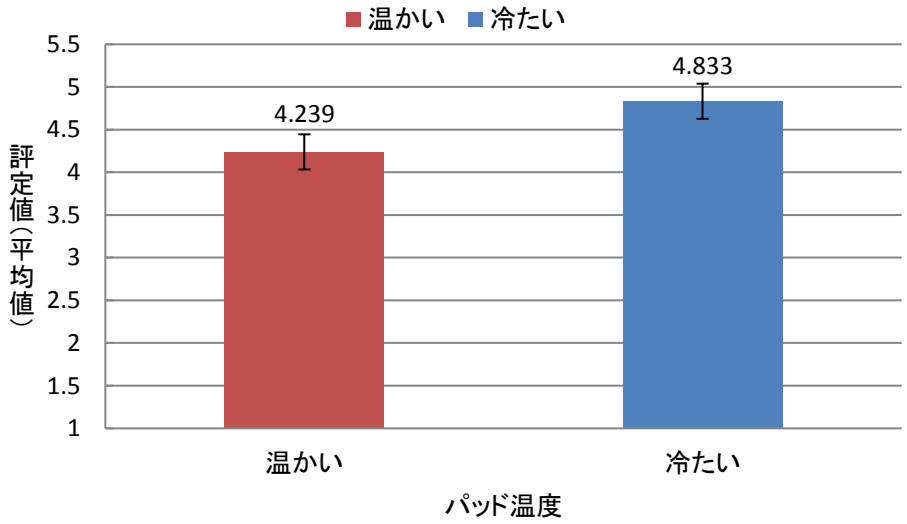


Figure 8. 他者評定（個人的好意・仕事仲間好意）における温度×評定順序×事前の SESRA の分析結果（推定値）

考察

自己・他者評定ともに仮説を支持する結果は得られなかった。全体を通してパッド温度による効果が見られており、自己評定に関しては評定順序と参加者の性役割観の効果が交絡した形で温度の効果が見られていた。以下ではそれぞれの結果について解釈を試みる。

先ず、パッド温度については、自己・他者評定ともに「冷たいパッドを持つと自己および他者の評定が評定次元（性格的温かさ/ 有能さ）に関わらず高まる」というパターンが見られた。この結果は、実験時の気象要素に起因した可能性が高い。今回の実験を行った期間は比較的気温と湿度が高い時期[3]であった。そのため、冷たいパッドを持つことで冷感とともに快感覚が引き起こされ、自己の性格や他者の印象がポジティブな方向に評定されたと考えられる。ただし、ムード得点については温度操作による統計的有意差が確認されなかったことは注意すべき点であり、気分一致効果による説明は結果の解釈として妥当ではないという指摘も予測される。しかし、本実験ではムード評定を自己・他者評定の最中ではなく、全ての課題が終了した後（パッド入り封筒を渡してから約 15 分後）に実施していた。時間経過とともに温度による快－不快感覚が弱まったのであれば、統計的有意差が見られなかった結果とも矛盾しないと考えられる。とはいえこうしたムードによる影響を統制するためにも、大きな快－不快感覚を生起させない温度範囲および実験時期の精査は必須である。

次に、男性参加者の性役割観によって評定値に異なるパターンが見られた結果について考察する。先ず自己評定の結果を見ると、伝統的主義的性役割観を持つ男性は、「他者⇒自

[3] 8 日間の実験時間帯の平均気温は 25.93℃、平均湿度は 84.72%であった。

己」の順で評定を行う条件でのみ、冷たいパッドによって自己の性格を評定次元に関わらず高く評価し、温かいパッドによって低く評価する効果が見られた。これは先程述べたように、温かい/ 冷たい温度によって誘発されたポジティブ/ ネガティブムードが自己の性格評定の高さ/ 低さに結びついた結果と考えられる。一方で、平等主義的性役割観を持つ男性では温度による効果は見られなかった。この性役割観による違いに関しては、伝統主義的性役割観を持つ男性参加者のみにおいて“女性と自己との比較”が生じた結果であると考えられる。伝統主義的性役割観を持つ男性は男女の性役割分業への意識が強いとされている（e.g., 鈴木, 1994）。こうした意識の強さは、男女間の序列意識の強さ（e.g., 「男性は女性よりも上に立つべき」）とも換言できるであろう。つまり、先に他者を評定すると、評定対象である女性と自分との比較が生じるため、内外の要因を自己の評定基準として取り入れやすい状態となり、結果的に温度（快－不快）感覚による影響を受け易くなったということである。平等主義的性役割観を持つ男性で温度の効果が見られなかったのは、男女間の序列意識の弱さからであろう。また、伝統主義的性役割観を持つ男性の中でも最初に自己評定を行う条件では温度の効果が見られなかった。この点については、女性との比較が生じないような順序であったために温度による影響を受けなかったのだと考えられる。

他者評定（性格的温かさ・有能さ）の結果では自己評定とは逆に、平等主義的性役割観を持つ男性においてのみ、温かい/ 冷たいパッドを持つとプロフィール女性の印象を評定次元に関わらず低く/ 高く評定していたが、伝統主義性役割観を持つ男性参加者ではパッド温度による効果が見られなかった。平等主義的性役割観を持つ男性の結果については自己評定と同様、気分一致効果による影響が見られたと考えられる。一方、伝統主義的性役割観を持つ男性においては温度による効果が消えていた。この性役割観による違いは何に起因するのであろうか。この点については女性表象の違いから解釈できると考える。沼崎（2006, 2012）のジェンダー・ステレオタイプ研究では、男性参加者が家庭的女性とキャリア的女性の性格や頻度を評定する場合、ある特定の状況下（e.g., 死すべき運命の顕現化、異性愛プライム条件下）では、その男性の性役割観の違いによって評定（i.e., 偏見、ステレオタイプ化）に相違が見られることが示されている。沼崎（2006）ではこの相違を、伝統主義的性役割観を持つ男性と平等主義的性役割観を持つ男性における“女性サブカテゴリー表象の形成状態の違い”によるものと指摘している。この考察によると、伝統主義的性役割観を持つ男性では女性のサブカテゴリー表象（i.e., 家庭的女性、キャリア的女性）の形成が弱く、「女性は家庭的であるべき」という考えの下で、女性全般が「温かくて能力が低い」という単一のカテゴリーに括られている（Figure 9 の 2 :「単純な女性カテゴリー」）。一方、平等主義的性役割観を持つ男性では、通常時から女性のサブカテゴリー表象が形成されているとしている（Figure 9 の 1 :「サブグループ化状態」）。

この考えを他者評定の結果に適用すると以下のようになる。まず、伝統主義的性役割観を持つ男性については、「女性は温かく能力が低い」というステレオタイプを強固に保持しているため、温度感覚に伴うポジティブ/ ネガティブな気分によって女性の評定が変化しに

くかったのだと考えられる。反対に、平等主義的性役割観を持つ男性は「女性のタイプは一様ではなく、複数のカテゴリーが存在する」という“女性の多様さ”に対する受容性を保持している状態、換言すると“女性への評定が変動しやすい状態”にあると解釈できる。そのため、温度感覚に伴う快－不快の感覚が女性の印象評定の手がかりとして採用され、冷たいパッドを持った場合はポジティブな気分に一致する形で「性格的温かさも有能さも高い女性」と、温かいパッドを持った場合はネガティブな気分に一致する形で「性格的温かさも有能さも低い女性」と認知したと考えられる。

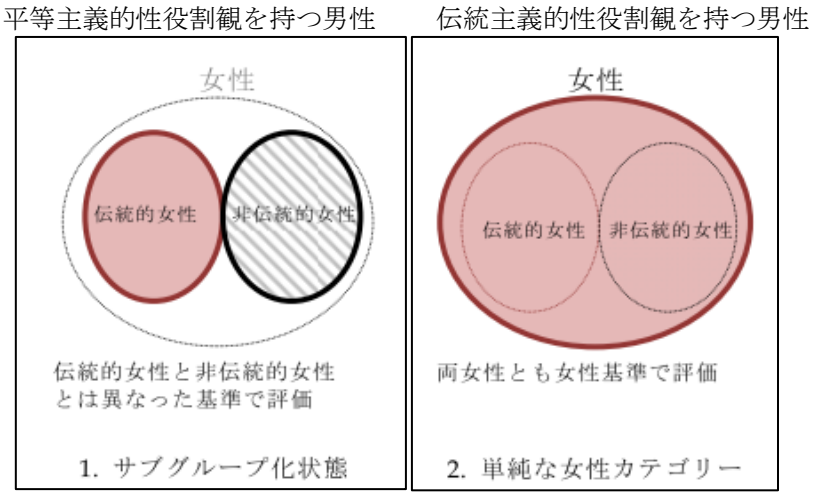


Figure 9. 男性における女性のサブカテゴリー表象（沼崎（2012）の図を一部拝借した）

実験 2 では、上記の結果で示唆されていた「自己・他者の評定順序」と「参加者の性役割観」による評定の違いに焦点を当て、男性から女性へのジェンダー・ステレオタイプ反応の変化や男性の自己評価の変化について検証した。また、温度感覚と性格的温かさ概念の双方向性を示すため、相反する性格的温かさと有能さを持つ女性を評定することが男性および女性の室温推定に影響を与えるかどうか検証した。

実験 2

評定女性の志向が室温推定に及ぼす影響、
評定女性の志向、評定順序、参加者の性役割観が自己認知、他者認知に及ぼす影響

実験 2 では実験 1 とは逆の因果関係に焦点を当て、性格的温かさ表象が周囲の環境の温度推定に影響するかどうかを検証した。温かい性格を持つ他者を見ると、その後の室温推定でより高い温度を報告すると考えられる（e.g., Szymkow et al., 2013）。本実験では、性格的温かさが高く能力が低い「家庭志向女性」と、性格的温かさが低く有能さが高い「キャリア志向女性」を評定他者として採用し、それぞれの印象を評定することで室温推定が温かい/ 冷たい（寒い）方向に変化するのかを検証した。

また、評定順序と性役割観による影響が男性の自己認知にどのような変化をもたらすのかについても、先述の女性タイプを考慮に入れて検証した。伝統主義的性役割観を持つ男性は女性を評定すると自己との比較が生じ、その後の自己評定において通常時と比べて回答を変化させることが実験 1 で示唆されていた。こうした自己認知の変化は評定女性の志向によっても影響を受けると考えられる。そこで本実験では、伝統主義的性役割観を持つ男性は、家庭的な女性を見た後（i.e., 「他者⇒自己」条件下）では自らの男らしさを高めようとするため、事前評定よりも自己の有能さを高めると予想した。一方、キャリア的な女性を見た後は、相手が持つ高い有能さ特性以外の面でも自らを高めようとし、事前評定よりも自己の性格的温かさと有能さの両方を高めると予想した。

加えて、他者評定に関しては、伝統主義的性役割観を持つ男性は「女性は能力が低くても、温かくあるべき」という伝統的な意味での規範的女性ステレオタイプに一致する家庭的な女性に対して、より高い好意を示すという仮説を設けた。

本実験は男性参加者を想定して計画されていたが、性差による影響も検討するために男女合わせて実験を実施した。仮説は以下の 6 つである。

【室温推定】

1. 評定対象の女性が家庭志向的（vs. キャリア志向的）である時に、自分がいる部屋の室温をより高く評定するであろう。

【自己評定】

2. キャリア志向女性の印象評定後に自己評定をする場合、男性は自己の性格的温かさおよび有能さを事前よりも高く評定するであろう。家庭志向女性の印象評定後に自己評定をする場合、男性は自己の有能さを事前よりも高く評定するであろう。
3. 仮説 2 の傾向は伝統的性役割観を持つ男性ほど顕著であり、平等主義的性役観を持つ男性では見られないであろう。

【他者評定】

4. 家庭志向女性を「性格は温かく、能力は低い」と、キャリア志向女性を「性格は冷たく、能力は高い」と評定するであろう。

5. 男性はキャリア志向女性よりも家庭志向女性への好意を高く評定するであろう。
6. 仮説 4、5 の傾向は伝統的性役割観を持つ男性において顕著に見られるであろう。

方法

実験計画

室温推定と他者評定（好意）については、参加者性（男性 vs. 女性）×評定女性のタイプ（家庭志向 vs. キャリア志向）×評定順序（自己⇒他者 vs. 他者⇒自己）×平等主義的性役割観 SESRA（連続変量） の参加者間要因計画であった。また、自己評定の変化量と他者評定（性格的温かさ、有能さ）については、参加者性（男性 vs. 女性）×評定女性のタイプ（家庭志向 vs. キャリア志向）×評定順序（自己⇒他者 vs. 他者⇒自己）×平等主義的性役割観 SESRA（連続変量）×評価次元（性格的温かさ vs. 有能さ）の混合要因計画で、前 4 つは参加者間要因、後 1 つは参加者内要因であった。

実験参加者

首都大学東京の一般教養科目「心の科学」を受講していた大学生 129 名（年齢 : M = 19.563, SD = 1.418）。参加者は 2（女性タイプ :「家庭志向」vs. 「キャリア志向」）×2（評定順序 :「自己⇒他者」vs. 「他者⇒自己」）の 4 条件にランダムに割り当てられた。

実験操作材料　他者評定課題の女性プロフィール

実験時期　2016 年 11 月中旬

手続き

参加者には予め実験実施の約 1 ヶ月半前に平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S, 鈴木, 1994）と、性格的温かさと有能さに関する自己評定項目に回答させた。

本実験は「自己の性格評定および他者の印象評定の個人差に関する研究」を行うという教示のもと、授業時間に質問紙をランダムに配布し、参加者のペースで回答させる集団質問紙実験の形式で行われた。質問紙の課題は、「自己の性格評定課題」、「他者の印象評定課題」、「室温推定」、「ムードチェック」で構成されていた（下記参照）。評定順序の操作については、「自己⇒他者」条件では自己評定、他者評定の順、「他者⇒自己」条件では逆の順になるよう質問紙を作成した。データの使用を許可し、回答を終了した参加者から順に質問紙を提出してもらい、実験を終了した。

自己の性格評定課題　性格的温かさ関連項目である SD 尺度（「親しみやすいー親しみにくい」「冷たいー温かい」「親切なー不親切な」）と有能さ関連項目である SD 尺度（「知的なー愚かな」「有能なー無能な」「能力の高いー能力の低い」）、性格的温かさと有能さに無関連な SD 尺度（「家庭重視志向ー仕事重視志向」「男性的なー女性的な」「明るいー暗い」「誠実なー不誠実な」）、計 10 項目に 7 件法で回答させた。性格的温かさ、有能さ関連項目は事前に実施した自己評定の項目と同一のものであった。

他者の印象評定課題　人物の印象を評定する課題として、ある女性のプロフィールを読ませた後、その女性の印象を回答させた。女性のプロフィールは「家庭志向的な女性」と「キャリア志向的な女性」の 2 タイプを用意し、参加者の女性タイプ条件（家庭志向 vs. キャリア志向）を操作した[4]（Appendix）。女性の印象に関する質問として、自己評定で用いたものと同様の SD 尺度 10 項目（性格的温かさ関連 3 項目、有能さ関連 3 項目、無関連項目 4 項目）と、実験 1 で用いたものと同様、好意を測定する 4 項目に 7 件法で回答させた。無関連項目の一つには、操作チェックの項目として「志向」に関する項目（「家庭重視志向－仕事重視志向」）が含まれていた。

室温推定　「現在、この教室の室温をどのくらい寒い・温かいと感じますか」、「現在、この教室の室温は何℃くらいだと感じますか。おおよその数値を回答して下さい」という 2 項目について、前者は 7 件法（1：寒い－7：温かい）で、後者は具体的な数値で回答させた。

ムードチェック　ムードに関する質問 4 項目（「いらいら」「気分が悪い」「心地よい」「楽しい」）について、「現在の自分の状態がどの程度当てはまるか」を 7 件法で回答させた（1：全く感じない～7：強く感じる）。

[4] 沼崎（2006）で用いられたものを一部変更した上で使用した。好ましさの天井効果を考慮し、女性のプロフィール文章には一般的に望ましくないと思われる情報も含めた。

結果

全参加者 129 名中、承諾書にサインをしなかった 1 名、日本語を母語としない留学生 2 名、重要な項目に未回答であった 1 名、事前の平等主義的性役割観尺度（SESRA）に未回答であった 5 名を除外した 120 名のデータを使用して分析を行った。

分析方法

標準化した事前の SESRA 得点に対して参加者性×女性タイプ×評定順序の分散分析を行ったところ参加者性の主効果のみが有意であった（F (1, 67) = 13.080, p = .000, η_p^2 = .105）（男性：M= -.249、女性：M= .419）。そこで、「自己評定の変化量」と「他者評定（性格的温かさ、有能さ）」に対しては参加者性（男 vs. 女：参加者間）×女性タイプ（家庭志向 vs. キャリア志向：参加者間）×評定順序（自己⇒他者 vs. 他者⇒自己：参加者間）×評定次元（温かさ vs. 有能さ：参加者内）×事前の SESRA のすべての効果を含む一般線形モデルによる分析を、操作チェックおよびその他の従属変数に対しては参加者性×女性タイプ×評定順序×事前の SESRA のすべての効果を含む一般線形モデルによる分析を行った。

操作チェック

女性タイプ　他者評定で測定した「家庭重視志向－仕事重視志向」項目の平均値を従属変数とした。数値が高いほど仕事重視志向と評定したことを意味している。分析の結果、女性タイプの主効果（F(1, 103) = 160.856, p = .000, η_p^2 = .610, 家庭：M= 2.525、キャリア：M= 5.965）、参加者性×SESRA の交互作用効果（F(1, 103) = 7.679, p = .007, η_p^2 = .069）が有意となったが、上位の参加者性×女性タイプ×SESRA の交互作用効果が有意になったため制限を受ける（F(1, 103) = 3.940, p = .050, η_p^2 = .037）。この 3 要因の交互作用のパターンを検証するために、SESRA 得点が高い参加者（+1SD）と低い参加者（-1SD）に分け、評定値の平均値をプロットしたものが Figure10 である。SESRA 得点の低い群（伝統主義的）と高い群（平等主義的）ともに、家庭志向女性よりもキャリア志向女性をより「仕事重視志向である」と評定しており（ps < .001）、特に SESRA 高群の女性は家庭志向女性をより「家庭重視志向である」と評定していた（p < .001）。交互作用効果が見られたものの、男女問わず、家庭志向女性よりもキャリア志向女性をキャリア的であると評定していたことから、プロフィール女性の操作は成功したと判断した。

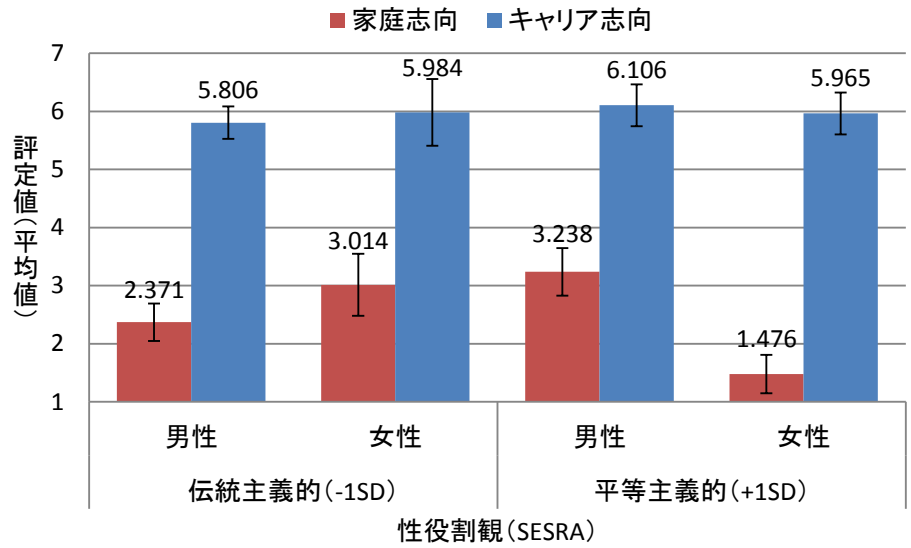


Figure 10. 他者評定（家庭重視志向－キャリア重視志向）における
参加者性×女性タイプ×SESRA の分析結果（推定値）

ムード　実験 1 と同様、「心地よい」、「楽しい」をポジティブ項目、「いらいら」、「気分が悪い」をネガティブ項目として合算し、ポジティブ得点からネガティブ得点を減算したものをムード得点とした。分析の結果、参加者性×女性タイプの交互作用効果が有意傾向であった（$F(1, 104) = 3.731$, $p = .056$, $\eta_p^2 = .035$）。後続の検定では有意差が見られなかったものの、全体としては、男性は評定他者が家庭志向女性である時に、女性は評定他者がキャリア志向女性である時にムードを高く評定するパターンが見られた（Figure 11）。

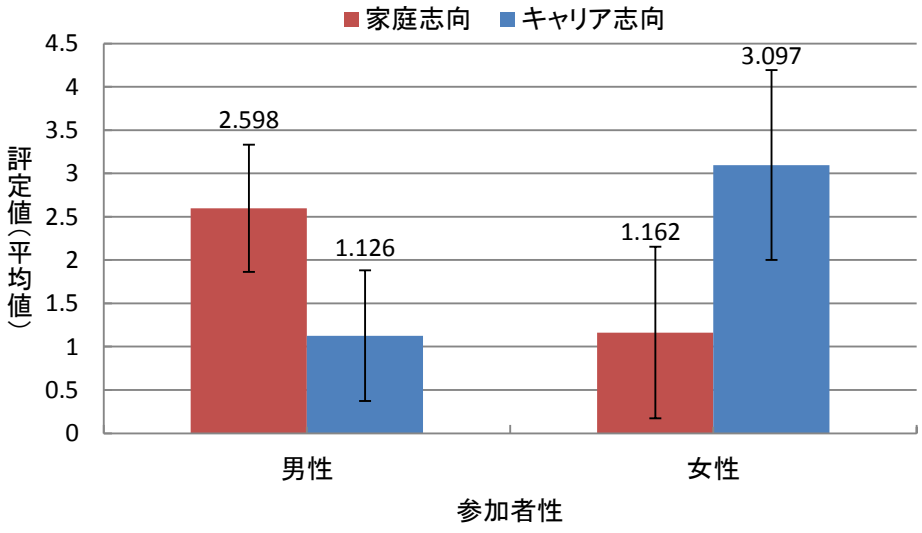


Figure 11. ムード得点における参加者性×女性タイプの分析結果

従属変数

温度推定（7 件法による推定）

温度推定項目「寒い（1）－温かい（7）」の平均値を従属変数とした。数値が高いほど室温を「温かい」と推定したことを意味している。分析の結果、参加者性×女性タイプ×SESRA の交互作用効果が有意傾向であり（$F(1, 104) = 3.197$, $p = .077$, $\eta_p^2 = .030$）、女性タイプ×評定順序×SESRA の交互作用効果が有意であった（$F(1, 104) = 8.185$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .073$）。まず、前者の交互作用のパターンを検証するため、SESRA 得点が高い参加者（+1SD）と低い参加者（-1SD）に分け、評定値の平均を男女ごとにプロットしたものが Figure 12 である。SESRA 高群の女性参加者において、評定他者が家庭志向女性（$M = 3.955$）よりもキャリア志向女性の時（$M = 4.846$）に室温を高く推定する傾向が見られた（$p < .05$）。一方、SESRA 低群では有意な効果は見られなかった。

次に、後者の交互作用のパターンを検証するために評定値の平均を SESRA 高/ 低群ごとにプロットしたものが Figure 13 である。SESRA 低群では、「他者⇒自己」条件の参加者において、評定他者が家庭志向女性（$M = 4.061$）よりもキャリア志向女性（$M = 4.959$）の時に室温を高く推定するパターンが見られ（$p = .059$）、「自己⇒他者」条件の参加者では逆のパターンが見られた。一方、SESRA 高群では、「自己⇒他者」条件の参加者において、評定他者が家庭志向女性（$M = 4.070$）よりもキャリア志向女性（$M = 5.060$）の時に室温を高く推定するパターンが見られたが（$p < .05$）、「他者⇒自己」条件の参加者ではそのパターンが消えていた。

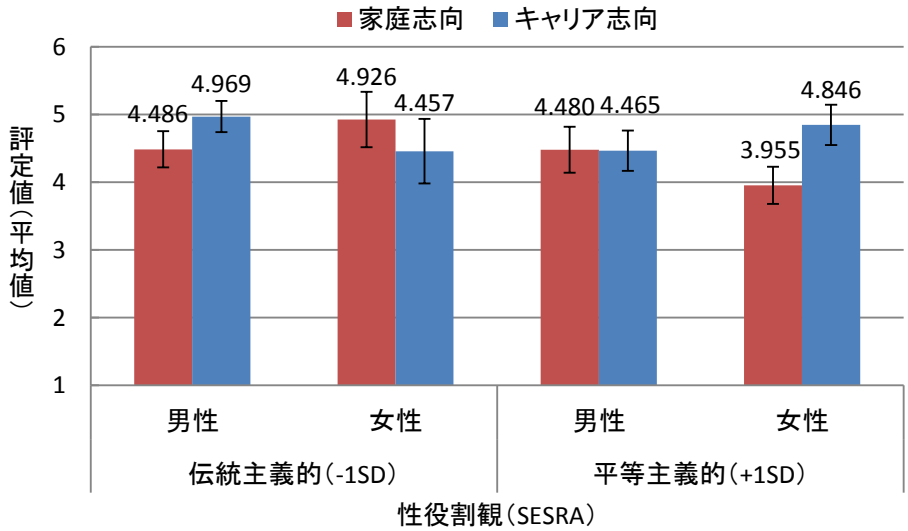


Figure 12. 温度推定値（7 件法）における参加者性×女性タイプ×SESRA の分析結果（推定値）

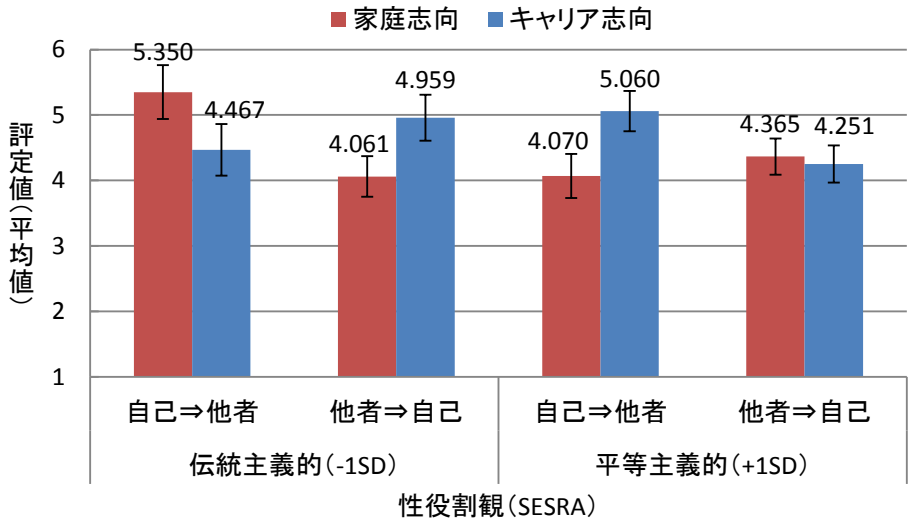


Figure 13. 温度推定値（7 件法）における女性タイプ×評定順序×SESRA の分析結果（推定値）

温度推定（数値による推定）

温度推定値（℃）の平均を従属変数とした。分析の結果、女性タイプ×評定順序×SESRA の交互作用効果が有意となったが（$F(1, 104) = 4.522$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .042$；Figure 14）、参加者性×女性タイプ×評定順序×SESRA の交互作用効果が有意となったため制限を受ける（$F(1, 104) = 7.208$, $p < .01$, $\eta_p^2 = .065$）。この交互作用のパターンを検証するために SESRA 高/ 低群に分け、男女ごとに評定値の平均をプロットしたものが Figure 15 である。女性について見てみると、SESRA 低群の中でも「自己⇒他者」条件の参加者において、評定他者が家庭志向（$M = 22.830$）（vs. キャリア志向：$M = 17.557$）の時に室温を高く推定する傾向が見られたが（$p = .054$）、「他者⇒自己」条件の参加者ではその傾向が消えていた。また、SESRA 高群の中でも「自己⇒他者」条件の参加者は評定他者がキャリア志向女性（$M = 23.474$）（vs. 家庭志向：$M = 18.541$）の時に室温を高く推定していたが（$p < .01$）、「他者⇒自己」条件ではその効果が消えていた。次に、男性について見てみると、SESRA 低群の中でも「自己⇒他者」条件の参加者は評定他者がキャリア志向（$M = 22.778$）（vs. 家庭志向：$M = 19.896$）の時に室温を高く推定していた（$p < .05$）。SESRA 高群では有意差は見られなかった。

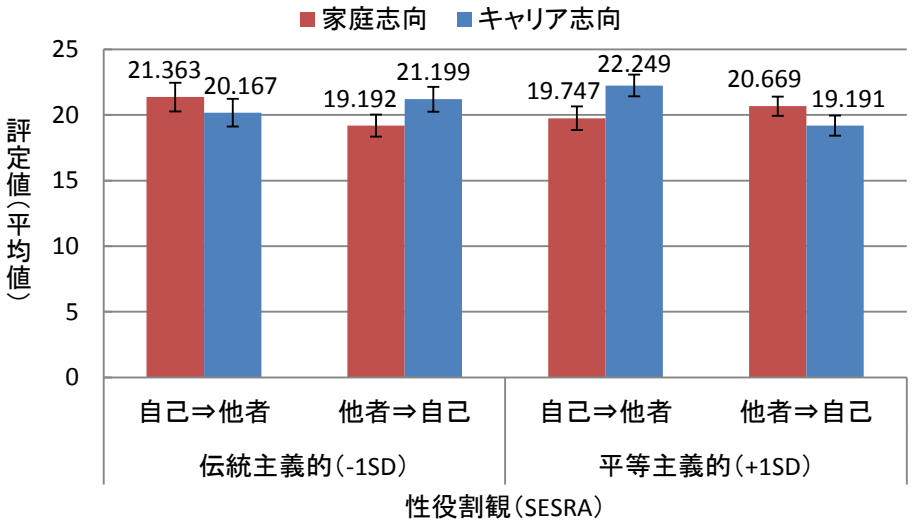
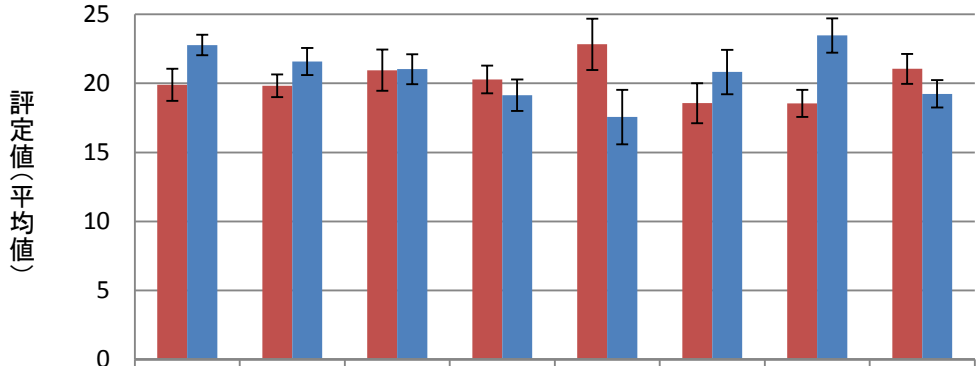


Figure 14. 温度推定値（数値）における女性タイプ×評定順序×SESRA の分析結果（推定値）



	男性				女性			
	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自
	伝統主義（-1SD）		平等主義（+1SD）		伝統主義（-1SD）		平等主義（+1SD）	
家庭志向	19.896	19.822	20.953	20.283	22.830	18.562	18.541	21.055
キャリア志向	22.778	21.579	21.024	19.139	17.557	20.819	23.474	19.243

Figure 15. 温度推定値（数値）における参加者性×女性タイプ×評定順序×SESRA の分析結果（推定値）

自己評定　変化量（性格的温かさ・有能さ）

実験で測定した自己評定項目の平均からバッテリーテスト時に測定した同項目の平均値を引き、得点が高いほど自己の温かさ/ 有能さ評定が高く変化したことを意味するように「性格的温かさ変化量」および「有能さ変化量」を求め、従属変数とした。

分析の結果、参加者性×女性タイプ×SESRA が有意傾向であった（$F(1, 104) = 3.374$, $p = .069$, $\eta_p^2 = .031$；Figure 16）。また、評定順序×評定次元の交互作用効果が有意となったが（$F(1, 104) = 6.304$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .057$）、上位の参加者性×評定順序×評定次元×SESRA の交互作用効果が有意傾向であり、制限を受ける（$F(1, 104) = 3.734$, $p = .056$, $\eta_p^2 = .035$）。この交互作用のパターンを検証するために SESRA 高/ 低群に分け、男女ごとに評定値の平均をプロットしたものが Figure 17 である。各交互作用で様々な有意差が確認されたが、仮説 2、3 を支持する効果は見られなかった。

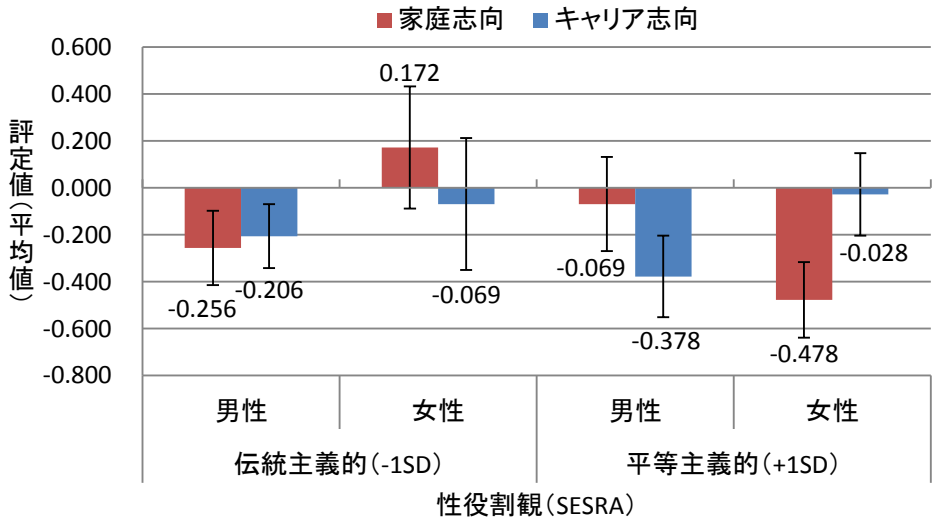
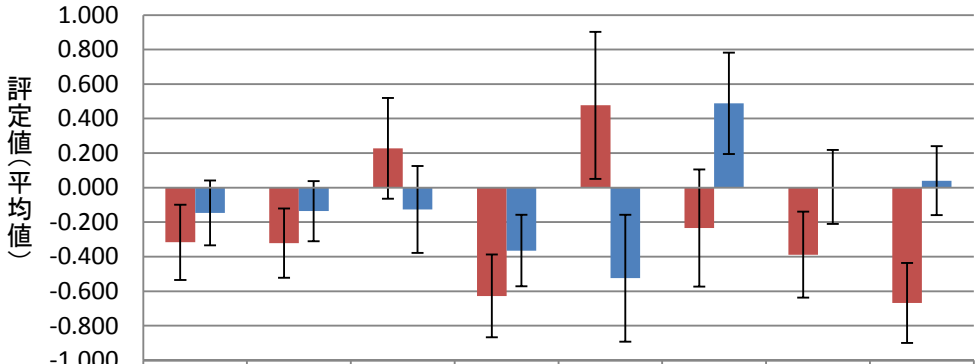


Figure 16. 自己評定（性格的温かさ・有能さ）における参加者性×女性タイプ×SESRA の分析結果（推定値）



	男性				女性			
	伝統主義（-1SD）		平等主義（+1SD）		伝統主義（-1SD）		平等主義（+1SD）	
	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自
■性格的温かさ	-0.317	-0.322	0.227	-0.628	0.477	-0.234	-0.389	-0.668
■有能さ	-0.147	-0.136	-0.127	-0.365	-0.525	0.488	0.004	0.040

Figure 17. 自己評定（性格的温かさ・有能さ）における
参加者性×評定順序×評定次元×SESRA の分析結果（推定値）

他者評定　（性格的温かさ、有能さ）

性格的温かさ関連 3 項目（α = .587）と有能さ関連 3 項目（α = .807）の単純加算平均をそれぞれ算出し、従属変数とした。分析の結果、女性タイプ（$F(1, 104) = 14.041$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .119$；家庭：$M = 4.369$、キャリア：$M = 4.851$）と評定次元（$F(1, 104) = 6.536$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .059$；温かさ：$M = 4.733$、有能さ：$M = 4.487$）の主効果、女性タイプ×評定次元の交互作用効果（$F(1, 104) = 92.772$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .471$）が有意となっていたが、上位の参加者性×評定次元×SESRA（$F(1, 104) = 6.599$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .060$）および参加者性×女性タイプ×評定順序×評定次元（$F(1, 104) = 5.665$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .052$）の交互作用効果が有意であったため制限を受ける。

まず、参加者性×評定次元×SESRA の交互作用のパターンを検証するため、SESRA 高/低群に分け、男女ごとに評定値の平均をプロットしたものが Figure 18 である。SESRA 高群では、女性参加者が評定他者の女性の性格的温かさ（$M = 5.089$）（vs. 有能さ：$M = 4.280$）をより高く評定していた（$p < .001$）。一方、SESRA 低群では有意差は見られなかった。

次に、参加者性×女性タイプ×評定順序×評定次元の交互作用のパターンを検証するため、男女ごとに評定値の平均をプロットしたものが Figure 19 である。女性参加者の「自己⇒他者」条件（$M = 5.091$）（vs. 「他者⇒自己」：$M = 4.159$）ではキャリア女性の性格的温かさをより高く評定していた。その他の部分では参加者性や評定順序を問わず全体的に、家庭志向女性は「性格は温かく、能力低い」と、キャリア志向女性は「性格は冷たく、能力は高い」と評価されていた（$ps < .05$）。これは仮説 4 を一部支持するものであった。

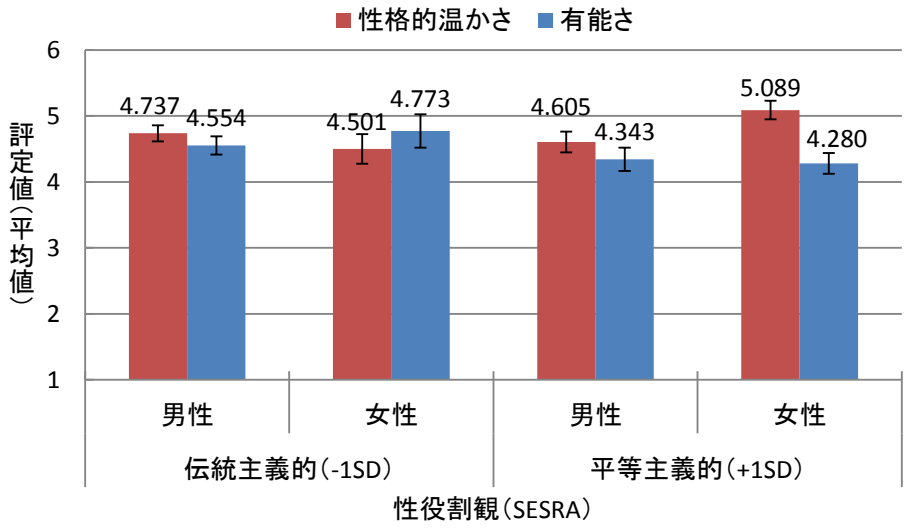
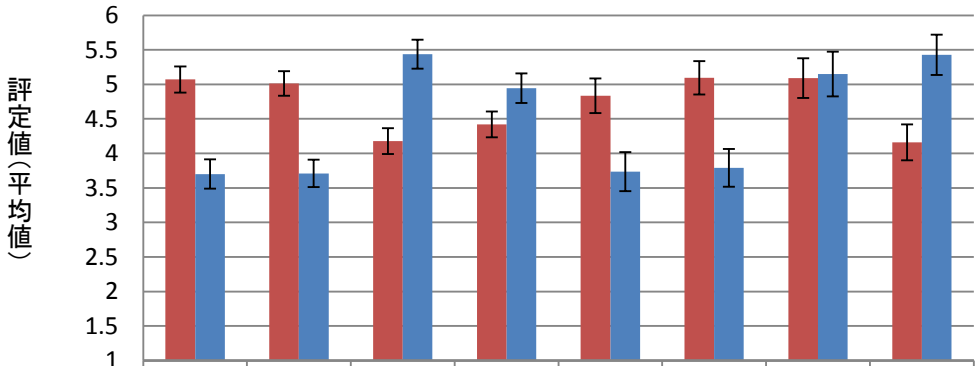


Figure 18. 他者評定（性格的温かさ・有能さ）における参加者性×評定次元×SESRA の分析結果（推定値）



	男性				女性			
	家庭志向		キャリア志向		家庭志向		キャリア志向	
	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自	自⇒他	他⇒自
性格的温かさ	5.072	5.013	4.179	4.420	4.835	5.095	5.091	4.159
有能さ	3.701	3.710	5.437	4.946	3.736	3.790	5.151	5.429

Figure 19. 他者評定（性格的温かさ・有能さ）における参加者性×女性タイプ×評定順序×評定次元の分析結果

女性への好意

「好意」 関連の 4 項目の得点の単純加算平均を算出し、従属変数とした（α = .879）。分析の結果、女性タイプの主効果が有意であったが（$F(1, 104) = 14.954$, $p < .001$, $\eta_p^2 = .126$）、女性タイプ×SESRA の交互作用効果が有意傾向であるため制限を受ける（$F(1, 104) = 3.493$, $p = .064$, $\eta_p^2 = .032$）。女性タイプの主効果に関しては、家庭志向女性（$M = 3.910$）よりもキャリア志向女性（$M = 4.895$）への好意がより高く評定されていた。また、女性タイプ×SESRA の交互作用を検証するため、SESRA 高/ 低群ごとに評定値の平均をプロットしたものが Figure 20 である。SESRA 高群では家庭志向女性（$M = 3.638$）よりもキャリア志向女性（$M = 5.067$）への好意がより高く評定されていた（$p < .001$）。これは仮説 5 とは逆の結果であった。SESRA 低群では有意差は見られなかった。

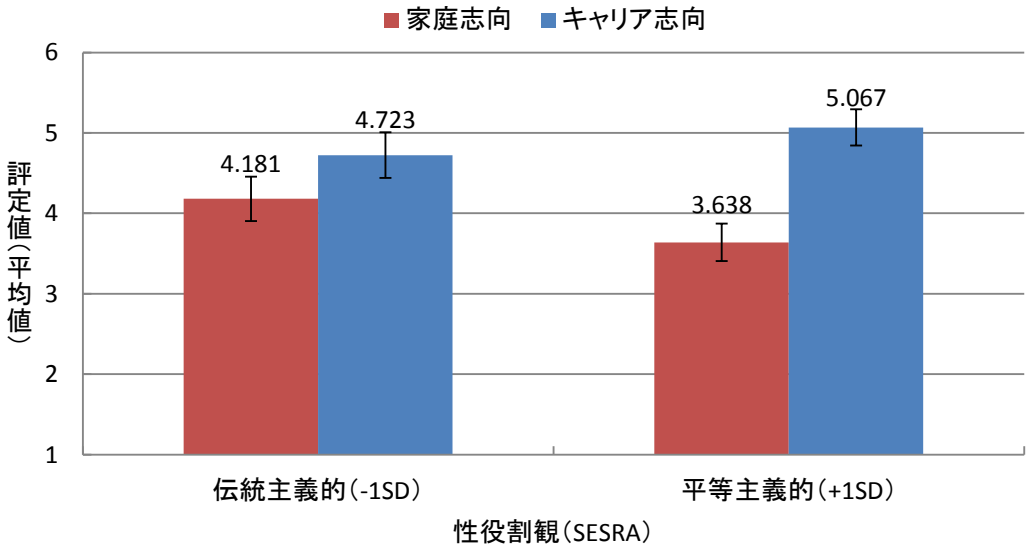


Figure 20. 他者評定（好意）における女性タイプ×SESRA の分析結果（推定値）

考察

室温推定と他者評定の結果では一部仮説が支持されたが、自己評定の結果では仮説は支持されてなかった。

まず、室温推定に関しては 7 件法による推定と数値による推定ともに、伝統主義的性役割観を持つ参加者では「自己⇒他者」条件で「性格が温かい家庭（vs. キャリア）志向女性を評定すると室温を高く推定する」という仮説を支持するパターンが見られた。一方、平等主義的性役割観を持つ参加者では、「自己⇒他者」条件において「性格が冷たいキャリア（vs. 家庭）志向女性を評定すると室温を高く推定する」という仮説と逆のパターンが見られた（Figure 13, 14）。そして、これらのパターンは女性参加者において顕著であった（Figure 12, 15）。この結果を女性参加者の性役割観ごとに解釈してみる。

伝統主義的な性役割観をもつ女性参加者では、室温推定の直前に見た女性の性格的温かさ/ 冷たさの方向に室温推定を高く/ 低く変化させている。この結果は想定していた身体性による影響が見られたことを示唆している。一方、平等主義的性役割観を持つ参加者の結果はどのように解釈できるであろうか。この点に関しては、「評定女性への好意」の結果が手がかりになると考える。好意の結果（Figure 20）を見ると、平等主義的参加者は家庭志向女性に比べてキャリア志向女性への好意を高く評定している。このことから、「自己⇒他者」条件の平等主義的な性役割観をもつ女性では、直前に評定したキャリア的女性に対する好意が性格的温かさ表象を活性化させ、室温推定が“温かい”方向に変化したという可能性が考えられる。対照的に、伝統主義的な性役割観をもつ参加者の好意評定では評定女性の志向による差異が見られなかった。つまり、「自己⇒他者」条件の伝統主義的参加者では、好意ではなく、家庭/ キャリア志向女性の性格的温かさ/ 冷たさが室温推定の高さ/ 低さに影響した（既述）ということである。上記の傾向がどちらの性役割観においても「自己⇒他者」条件のみで見られたのは、「他者⇒自己」条件では評定女性を見てから室温推定を行うまでにタイムラグがあるために、性格的温かさおよび好意による影響が薄れたのだと考えられる。

しかし、上記の解釈だけでは説明できない点もいくつかある。まず一つめに、「自己⇒他者」条件の伝統主義的な男性参加者は“キャリア志向女性”を見ると室温を高く推定するという、女性参加者と逆の結果が見られた点である（Figure 15）。この点については、「性格の冷たい他者を見たことで自己の性格的温かさが相対的に高く知覚され、結果として室温推定が温かい方向へと変化した」という可能性も考えられる。しかし、自己評定において対応した結果が見られなかったことや、有意ではないものの、男性の「他者⇒自己」条件でもキャリア志向女性を見て室温を高く推定していたこと（Figure 12, 15）を踏まえると、男性の結果には別の解釈が必要となるであろう。二つめは、伝統主義的な参加者において男女ともに、「他者⇒自己」の順で評定するとキャリア志向女性を見た後で室温を高く推定していたという点である（Figure 13, 15）。男性については既述の通りだが、女性についてはどのような解釈が可能であろうか。一つの理由として考えられるのは、ムードによ

る影響である。ムード得点の結果では女性タイプによる差異が参加者性で対照的となっていたが、事前の SESRA ごとにその結果をプロットしたところ、伝統主義的な女性でのみ、キャリア志向女性が評定他者である時により高いムード得点となる傾向が見られた（n.s. ; Figure 21）。ムード得点の性別間の対照性はこの傾向に起因している可能性が高い。また、伝統主義的女性が「他者⇒自己」条件でキャリア女性を評定した時に室温を高く感じたのも、このポジティブなムードが原因となっている可能性がある。一方、女性の他の条件においても気分一致効果が働いていたのではという指摘も想定される。しかし、女性参加者の「自己⇒他者」条件の結果はムードのパターンとは一致しておらず、温度推定の結果の全てを説明するのは困難であろう。ムードと評定との関連や男女で異なる結果が見られた原因については、今後さらなる検討を要する。

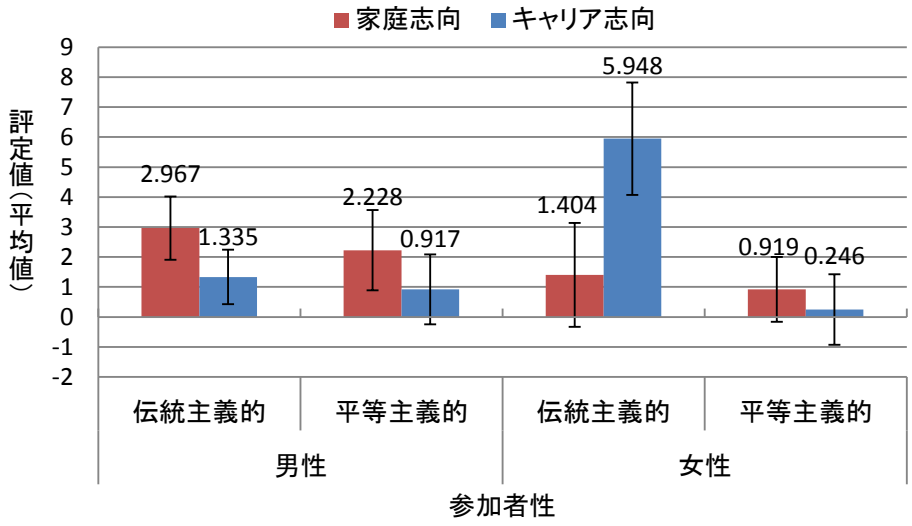


Figure 21. ムード得点における参加者性×女性タイプ×SESRA の分析結果（n.s.）（推定値）

次に自己評定の結果について考察する。想定した効果が見られなかった原因を探るため、事前の自己評定（性格的温かさ、有能さ）の平均値に対して参加者性×女性タイプ×評定順序×評定次元×SESRA の全ての効果を含む一般線型モデルによる分析を実行した結果、女性タイプや評定順序の効果を含む交互作用効果が有意となっていた。さらに、自己評定の性格的温かさ、有能さの変化量それぞれに対して、事前の評定値を標準化した上で共変量に入れ、参加者性×女性タイプ×評定順序×SESRA×事前評定の全ての効果を含む一般線型モデルによる分析を行ったところ、性格的温かさ、有能さともに事前評定の主効果が有意となっており、事前の評定が低い参加者は変化量が正の値に、事前評定が高い参加者は変化量が負の値になるという回帰が見られた。これらの結果から、今回の実験では参加者のランダム割り当てに失敗していたこと、また、そうした実験要因による事前評定への

効果と回帰による効果が交絡する形で自己評定の変化量に影響を与えた可能性が示唆された。自己評定で仮説を支持するパターンが見られなかったのはこの実験手続き上の不備のためと推測する。この点に関しては、群間の等価性をより促進するような手続きが必要とされる。

最後に、他者評定に関しては、仮説 4 は支持されていた。しかし、「伝統主義的な男性では家庭志向女性への好意をより高く評定するであろう。」という仮説 5、6 については支持されておらず、平等主義的参加者ではキャリア志向女性への好意が高く評定されており、伝統主義的参加者では女性の志向による好意の有意差は見られなかった。(Figure 20)。この点については、キャリア志向女性の性格的温かさ評定が関連している可能性がある。実験では想定通り、「キャリア志向女性の有能さは高く、性格的温かさは低く」評定されていたが、キャリア志向女性の性格的温かさ平均は 4.462 と中央よりもやや高い数値をとっていた。女性タイプの主効果としても、家庭志向女性（M= 4.369）よりもキャリア志向女性（M= 4.851）の方が全体的な評定が高くなっていたことから、キャリア志向女性への評定の相対的な高さが好意に結びついた可能性がある。この点については、キャリア志向女性のプロフィールに性格的温かさ関連の情報があまり含まれていなかったことが原因の一つとして挙げられよう。平等主義的参加者のみで有意差が見られたのは、平等主義的参加者の中で「女性は社会に出て働くべきである」という意識が保持されており、この考えに一致するキャリア志向女性が好意の対象となったという可能性が考えられる。実験材料としてより妥当なものにするためにも、プロフィール内容に性格的温かさに関連する情報を含める等して、改善を図る必要があるであろう。性差や性役割観の検討も含め、さらなる検証が必要な部分である。

総合考察

本研究では身体的温かさと性格的温かさの相互作用を身体性認知の観点から検討した。その結果、実験 1 では想定していた身体性の影響は見られず、「暑い中で冷たいものを持つと評定が高くなる」という気分一致効果が確認された。特に自己評定については、伝統的主義的男性が女性他者、自己の順で性格評定する場合においてのみ気分一致効果が見られ、平等主義的性役割観を持つ男性では見られなかった。この結果は、伝統主義的男性特有の“男女間の序列意識の強さ”とそれによって生じる“比較意識”が、快－不快感覚を自己評定の手がかりとして採用させることを示唆するものであった。他者評定については、平等主義的男性においてのみ快－不快感覚による気分一致効果が見られた。平等主義的男性では通常時から女性のサブカテゴリー表象が形成されており（沼崎, 2006）、そうした女性の多様さへの受容性が女性評定の変動しやすさに繋がり、快－不快感覚を評定の手がかりとして採用するようになったと解釈できる。他方、伝統主義的男性は女性全般を「温かくて能力が低い」という単一のカテゴリーに括っており（沼崎, 2006）、「女性は温かく能力が低い」というステレオタイプを強く保持しているため、女性評定が快－不快感覚によって変動しなかったのだと考えられる。

実験 2 では、「性格的温かさと有能さが身体温度感覚に及ぼす効果」が女性参加者において顕著に見られた。特に、自己、女性他者の順で評定を行った女性参加者の中でも、伝統主義的な女性は家庭的女性を見た後でより温かい温度を感じており、平等主義的な女性は好意の対象であるキャリア的女性を見た後でより温かい温度を感じていた。前者の結果は直前に見た人物の性格的温かさが身体的温かさに影響を及ぼしたことを、後者の結果は直前に見た人物の好意が身体的温かさに影響を与えたことを示唆している。同時にこの結果は、「単なる温かい/ 冷たい他者」が身体の温度感覚に影響を及ぼすだけではなく、相反する性格的温かさ特性と有能さ特性を持つ人物（i.e., 「温かいが能力は低い」、「冷たいが能力は高い」）を印象評定することも、身体的温かさに影響を与え得ることを示唆している。一方で、室温推定のパターンは男女間で異なっており、性差についての更なる検証の必要性が示唆された。

また、実験 2 では実験 1 で示唆された「男性の性役割観と自己他者の評定順序が自己認知に与える影響」を相反する性格的温かさと有能さを持つ女性を呈示することで検証した。伝統主義的な男性は序列意識が高いため、家庭的女性を見た後は自己の有能さを、キャリア的女性を見た後は自己の性格的温かさと有能さの両方を高めると予想したが、分析の結果、想定した効果は見られなかった。一方で、事前の自己評定の高低によって変化量が既定される“回帰”が生じており、それが実験要因（i.e., 女性のタイプ、評定順序）の影響と交絡する形で見られたことから、ランダム割り当ての失敗という手続き的不備による結果だと示唆された。さらに、他者評定については、男女問わず「家庭的女性は“温かく能力が低い”と、キャリア的女性は“冷たく能力が高い”と評定される」という予想通りの

結果が示されていた。しかし、「男性は家庭的女性に対してより好意を抱く」という仮説は支持されず、逆にキャリア的女性に対する好意が高まるパターンが伝統主義的な参加者において確認された。この点に関しては、キャリア志向女性の性格的温かさ特性や平等主義的参加者の規範的ジェンダー・ステレオタイプが影響している可能性が示唆された。

上記の結果を踏まえ、以下では本研究の身体性認知研究としての課題や今後必要となる検証を、実験材料・手続きの改善、統制条件、個人差の観点から考察する。

実験材料、手続きの更なる精査

まず実験 1 の温度操作についてである。考察でも触れたように、実験 1 のような温度操作を行う際は極端な快－不快感覚が生じない温度範囲を予備実験によって丁寧に検証する必要があったと考える[5]。これに関連して、どのような環境条件（e.g., 気温、湿度、他者との距離）で温度感覚が快－不快感覚と結び付くのかも今後更に検証することが求められるであろう。実験材料の温度のみならず実験時期や外気温まで報告している身体性論文は少ないように思えるが、そうした境界条件の検証は身体性研究にとり重要な意味を持つと考えられる。実施時期は定かではないが、Williams & Bargh（2008）を追試した塩沢・大江（2012）の実験でも、温かさ感覚によって生じた気分一致効果が対人・対物評定にポジティブな影響を及ぼしたことが示唆されている[6]。このようなムードを統制するための温度の精査以外の方法としては、「参加者に一定時間（実験室等の）快適な温度の中で過ごさせた後に課題を行わせる」等、実験時期や実験室内外の気温差をより考慮した実験計画が必要であろう。

また、実験 2 の手続きについても改善すべき点がある。実験 2 の質問紙調査は比較的広い教室で行っていたが、参加者の教室の中での座席位置（e.g., 前方教卓側と後方窓側）によって室温の感じ方に違いが生じた可能性も考えられる。今回は部屋の温度を記録していなかったが、室内の温度差や元々の室温の影響を考慮に入れて分析するためにも、実験中の室温を測定する必要があるであろう。また、室温推定を扱った身体性実験では、参加者間の物理的距離が身体的温かさに影響を及ぼすことも示されている（e.g., IJzerman & Semin, 2010）。「単なる温かい/ 冷たい人ではない家庭的女性/ キャリア的女性が室温推定に影響を及ぼす」という結果（実験 2）を、実験室等で参加者間の距離をより統制し、再現を試みることも求められる。

統制条件の追加

実験 1 では温かい/ 冷たい条件間の比較を試みたが、温度感覚を生起させない統制条件を設けることで、温かい感覚と冷たい感覚のどちらが（あるいは両者が）主に効果を促進す

[5] 本研究でも実験 1 を実施するにあたって温度操作の予備実験は行ったが、サンプル数が不足していた。

[6] 実験で用いられた温かい/ 冷たい飲み物の温度は各々約 45℃/ 約 20℃であった。

るかを検証することは非常に重要性であろう（Bargh & Shelve, 2012）。Bargh & Shelve（2012）の実験では、参加者に温かい/ 冷たいパッドを持たせてから孤独感尺度に回答させた結果、冷たい条件の参加者は温かい条件や統制条件の参加者よりも孤独感をより増加させたが、温かい条件の参加者と他の群間との有意差は見られなかった。また、IJzerman & Semin (2010)では、参加者との類似性が低い人物についての文章を読ませるという社会的冷たさの操作と、類似性の高い人物についての文章を読ませるという社会的温かさを操作した場合で室温推定に変化が見られるかを検証している。この実験の結果、社会的冷たさ条件では社会的温かさ条件に比べて 3 倍の効果量が見られていた。また、こうした冷たさ感覚による影響の強さを裏付ける神経生理学的な結果も存在している（Kang, Williams, Clark, Gray, Bargh, 2010）。IJzerman & Semin（2010）はこれらの結果について、“人の通常時の状態や志向は「やや温かい」状態にある”とし、“そのため、（通常の温かい状態に）更なる温かい感覚が得られたとしても、冷たさ感覚と比べて変化しにくい”と考察している。この考えが正しければ、身体性実験において温かい感覚による影響は見られにくいということになるが、一方で、温度操作の結果は実験で想定される場面 (e.g., 対人関係、消費者行動）や従属変数の測定指標（e.g., 温かさ/ 冷たさ関連指標）等にも依存すると考えられる。如何なる状況で温かい/ 冷たい温度の影響が見られるのか深く探るためにも、統制条件を設けた実験計画が必要であろう。

また、実験 2 についても同様に、統制条件を設ける必要がある。今回は温度推定に影響を与える要因として家庭志向、キャリア志向という 2 つの女性タイプを用意したが、性格的温かさが身体的温かさに影響を与える因果関係を見る際も統制条件を設けることで、性格的温かさ/ 冷たさの効果の違いをより詳細に検証できると考えられる。実験 1 で用いた「家庭とキャリアの両方を志向する女性」を統制条件として加え、更なる検証を試みたい。

個人差の検討

実験 1 および 2 ではジェンダー・ステレオタイプに関わる自己・他者認知を取り上げたため、参加者の平等主義的性役割観を個人差として測定していた。しかし、身体的温かさが心理的温かさに及ぼす影響を調整する個人差については検討を行っていない。発達初期において養育者と温かさを伴う身体的接触を経験することがその後の愛着スタイルを決定するという Bowlby (1969) らの愛着理論に基づき、Ishii & Numazaki (2012) や IJzerman, Karremans, Thomsen, & Schubert（2013）は、身体的温かさによる影響が大学生参加者の自尊心や子どもの愛着スタイルによって調整されることをそれぞれ見出している。今後、身体的温かさと性格的温かさの相互作用を検証する際は、愛着に関連する上記のような個人差を考慮に入れる必要がある。

実験 2 において、女性参加者では好意や身体性の効果が見られ、男性参加者では見られなかった理由についても検討する必要がある。この性差については、男女の温度感覚の違いが影響している可能性が考えられる。一般的に、男性は女性よりも代謝が良く、皮膚表

面の温度が高いことや、女性は男性よりも冷え症が多いこと等が知られている。先述のIJzerman & Semin（2010）の考察にある「通常時からの変化のしやすさ」を踏まえると、「男性では冷たさ感覚が、女性では温かさ感覚が効果を及ぼしやすい」、「女性は暑さ－寒さの敏感性を持つため、温度による効果が見られやすい」等の仮説も考えられるであろう。室温推定に及ぼす性格的温かさによる影響が男女で異なっていた実験2の結果については、その全て説明する解釈は現時点では持たない。

本研究結果のより包括的な解釈を実現するためにも、これまで挙げた改善点や温度知覚の性差が生じた原因等を踏まえた検証を今後更に行う必要がある。

Appendix

- 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）（鈴木, 1994）　15 項目

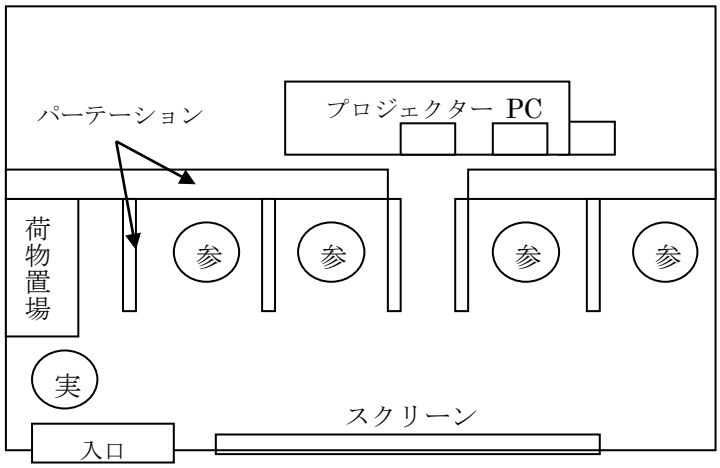
1. 女性は、家事や育児をしなければならないから、フルタイムで働くよりパートタイムで働いたほうがよい
2. 女性の居るべき場所は家庭であり、男性の居るべき場所は職場である
3. 主婦が仕事を持つと、家族の負担が重くなるのでよくない
4. 男の子は男らしく、女の子は女らしく育てることが非常に大切である
5. 主婦が働くと夫をないがしろにしがちで、夫婦関係にひびがはいりやすい
6. 家事や育児をしなければならないから、女性はあまり責任の重い、競争の激しい仕事をしないほうがよい
7. 娘は将来主婦に、息子は職業人になることを想定して育てるべきである
8. 子育ては女性にとって一番大切なキャリアである
9. 結婚生活の重要事項は夫が決めるべきである
10. 結婚後、妻は必ずしも夫の姓を名乗る必要はなく、旧姓で通してもよい
11. 経済的に不自由でなければ、女性は働かなくてもよい
12. 女性が、社会的地位や賃金の高い職業を持つと結婚するのがむずかしくなるから、そういう職業を持たないほうがよい
13. 女性の人生において、妻であり母であることも大事だが、仕事をすることもそれと同じくらい重要である
14. 女性はこどもが生まれても、仕事を続けたほうがよい
15. 家事は男女の共同作業となるべきである

● 実験台本（実験 1）

○ 準備するもの

1. 実験参加依頼書
2. 実験参加承諾書
3. レポートに関する説明用紙
4. ボールペン　4 本
5. ボード（A4、A5）4 組
6. パソコン
7. プロジェクター
8. パーテーション　7 つ
9. 封筒（角形 6 号　角形 5 号）　4 組
10. クリップ大　8 個（2×4 人）
11. 温熱パッド　8 枚（2×4 人）
12. 回答用紙　4 部

○ 部屋の配置



実：実験者、参：実験参加者

- 参加者同士が互いの様子を見られないよう、実験室はパーテーションで仕切られていた。
- 実験実施者は、実験の説明や最後のデブリーフィング以外は目立たない場所で待機していた。
- 実験室は実験開始時間の 10 分前から入室が可能となっていた。

- 家庭もキャリアも両方志向する女性プロフィール（実験 1）

学歴	都内某 4 年制大学 2 年生
趣味	料理（特にお菓子作り）
よく見るテレビ番組	ドラマ、教養番組
よく聴く音楽	J-POP
休日の過ごし方	昼過ぎまで寝る、ファッション雑誌を見る
仕事に対する態度	培った専門的知識を生かし、リーダーとなって、仕事がしたい
好きな時間	自分の部屋でぐうたらしている時間、 友達とのおしゃべり
日々気を付けていること	朝ごはんをちゃんと食べること、 飲み会でハメを外しすぎない
恋人・結婚相手に求めるもの	自分の世界に干渉してこない人 隠し事をせず家族を大切に思ってほしい
恋人・結婚相手に対する態度	対等な関係、精神的な支えでありたい 大切な存在であり、最優先したい
大学生活	在学中から将来に向けて、多くの資格を取得したい 同時に旅行やスキーなど、大学生らしいことも楽しみたい
将来	結婚したらいい母親となって、平凡でも幸せな家庭を築いていきたい 仕事でもどんどん実績を上げて、活躍したい
他者からの評価	基本的には控えめで古典的な日本人女性の良さを持っているといえるが、さっぱりしてエネルギッシュな部分もある 向上心があり献身的な女性だが、お節介でときに強引なところがある 他人に厳しすぎる部分もある

● 科学技術に関する文章（実験 1）

ビーコンの利用拡大

“ビーコン（Beacon)”とは、近距離無線通信ができる発信器である。企業や店舗による利用が拡大している。

≪ビーコンの特徴≫

- 屋内においても、利用者の今いる位置情報や近くにある店舗の情報をスマートフォン（スマホ）に送れる。
- １台当たり数千円で導入でき、維持費も安価。

≪利用例≫

- 商業施設や駅構内で、クーポンや道案内をスマホに配信する。
- 空港で待ち時間をスマホに表示する。

● 評定対象女性（実験 2）

○ 家庭志向女性のプロフィール

学歴	都内某 4 年制大学 2 年生
趣味	料理（特にお菓子作り），ビーズアクセサリー作り
よく見る TV 番組	ドラマ，バラエティー
よく聞く音楽	J-POP
休日の過ごし方	ショッピング，ファッション雑誌を読む
仕事に対する態度	結婚したら辞める，楽しい環境で働きたい グループの一員として仕事ができればよい
好きな時間	女友達と集まってお茶をする時間
日々気をつけていること	朝ご飯をちゃんと食べること，飲み会ではハメを外しすぎない
恋人・結婚相手に求めるもの	経済力，優しさ，誠実さ，包容力 リーダーシップ，隠し事はしないで欲しい
恋人・結婚相手に対する態度	守られたい，引っ張っていって欲しい 何よりも大事で，なくてはならない存在であり，最優先したい.
将来	在学中は，旅行とかスキーとか社会に出たらなかなかできないことをたくさんやりたい．卒業したら女の人にふさわしく，結婚して，夫になる人を支えながら，いい母親となって，平凡でも幸せな家庭を作りたい.
他者からの評価	周囲に配慮をもって接することができるが，周りに流されることもある.

○ キャリア志向女性のプロフィール

学歴	都内某 4 年制大学 2 年生
趣味	アウトドア，語学
よく見る TV 番組	ニュース，ドキュメンタリー
よく聞く音楽	J-POP
休日の過ごし方	ショッピング，資格の勉強をする
仕事に対する態度	何があっても仕事は続ける 培った専門的知識を生かし，リーダーとなって仕事がしたい.
好きな時間	ゼミやアルバイトで社会人の人と交流する時間
日々気をつけていること	朝ご飯をちゃんと食べること，飲み会ではハメをはずしすぎない
恋人・結婚相手に求めるもの	全てにおいて理解のある人，教養と自立心のある人 自分の世界を尊重してくれる人
恋人・結婚相手に対する態度	対等な関係， 精神的な支えであって欲しい
将来	在学中から将来に備えて，会計士資格などの資格をとりたい. 女性ももっと社会に出て活躍するべきだと思うので，バリバリ働いて， キャリアアップを目指したい．最終的には管理職として仕事をしたい.
他者からの評価	自分の生き方にはっきりとした目標を持っているが，周りに流される こともある.

引用文献

Ackerman J. M., Nocera C. C., Bargh J. A. (2010). Incidental haptic sensations influence social judgments and decisions. *Science*, **328**, 1712-1715

Bargh, J. A., & Shalev, I. (2012). The substitutability of physical and social warmth in daily life. *Emotion*, **12**, 154-162.

Bargh, J.A. (2006). What have we been priming all these years? On the development, mechanisms, and ecology of nonconscious social behaviour. *European Journal of Social Psychology*, **36**, 147-168.

Bowlby, J. (1969). Attachment and loss. London: Hogarth Press.

Carney, D., Cuddy, A., & Yap, A. (2010). Power posing: brief nonverbal displays affect neuroendocrine levels and risk tolerance. *Psychological Science*, **21(10)**, 1363-1368.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., Xu, J. (2002). A Model of (often Mixed) Stereotype Content：Competence and warmth Respectively Follow from Perceived Status and Competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 878-902.

Harlow H. (1958) . The nature of love. *American Psychologist*, **13**, 673-685.

IJzerman, H., & Semin, G. R. (2010). Temperature perceptions as a ground for social proximity. *Journal of Experimental Social Psychology*, **46**, 867-873.

Ijzerman, H., Karremans,J., Thomsen,L., & Schubert, T.W. （2013）. Caring for Sharing：How attachment styles modulate communal cues of physical warmth. *Social Psychology*, **44**, 160-166.

Inagaki, T. K., & Eisenberger, N. I. (2013). Shared neural mechanisms underlying social warmth and physical warmth. *Psychological Science*, **24**, 2272–2280.

Ishii, K., & Numazaki, M. (2012) . Are the Japanese metaphors "one's head is hard" and "one's head is soft" embodied ?. presented poster at The 13th annual Society of Personality and Social Psychology conference, San Diego, USA.

Kang, Y., Williams, L., Clark, M., Gray, J., Bargh, J. (2010). Physical temperature effects on trust behavior：The role of insula. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*. **6(4)**, 507-515.

Lee, S. & Schwarz, N. (2012). Bidirectionality, mediation, and moderation of metaphorical effects: The embodiment of social suspicion and fishy smells. *Journal of Personality and Social Psychology*, **103(5)**, 737-749.

沼崎　誠 (2006) . 潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討　科学研究費補助金研究成果報告書 (基盤研究(C), 2003~2005 年度) .

沼崎　誠 (2012) . ジェンダーステレオタイプと性役割的偏見の再生産に関わる社会的認知研究　科学研究費補助金研究成果報告書 (基盤研究(C), 2007~2009 年度) .

沼崎誠・松崎圭佑・埴田健司 (2015) . 持つものの柔らかさ・硬さによって生じる皮膚感覚が対人認知と自己認知に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 55(2), 119-129.

塩沢萌・大江朋子・望月要 （2012）. 身体的温かさの経験が対人的な温かさを促進する Williams & Bargh （2008）の追試. 日本行動分析学会第 30 回大会論文集,37.

Slepian, M. L., Weisbuch, M., Rule, N. O., & Ambady, N. (2011). Tough and tender：Embodied categorization of gender. *Psychological Science*, **22**, 26-28.

鈴木 淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成. 心理学研究, **65**, 34-41.

Szymkow, A., Chandler, J., IJzerman, H., Parzuchowski, M., Wojciszke, B. (2013). Warmer hearts, warmer rooms: How positive communal traits increase estimates of ambient temperature. *Social Psychology*, **44**, 167-176.

Williams, L. E., & Bargh, J. A. (2008). Experiencing physical warmth promotes interpersonal warmth. *Science*, **322**, 606-607.